アイヌ民族問題に関する社会福祉研究

――歴史的視点の必要性――

〈資料〉秋辺得平　アイヌの文化・歴史と日本社会

新家　江里香
（文学研究科社会福祉学専攻博士課程後期）

はじめに

今日、世界の先住民族の文化、自然との関わり方などに注目が集っている。一九九三年の国際先住民族年、それに続く「世界の先住民族の国際一〇年」によって、日本でも世界の先住民族、アイヌ民族に対する関心が高まってきた。そして、北海道ウタリ協会の働きかけなどによって一九九七年五月には、「アイヌ文化の振興並びにアイヌの伝統等に関する知識の普及及び啓発に関する法律」（以下、アイヌ文化振興法とする）が成立し、一八九九年以来、五回の改正を経ながら一〇〇年近く存在した北海道旧土人保護法が廃止となった。[1] このような動きを背景にして、社会福祉という観点から、先住民族問題に関する研究が見られるようになった。[2] 本稿においては、これらの状況をもとに、先住民族問題（本稿ではアイヌ民族問題）における社会福祉の位置づけを歴史的な視点をもって検討することの必要性に関する考察を行いたい。従って、以下の手順で報告を行う。第一に先住民族問題とは何か（どのような問題によって顕在化し、そ

の背景には何があるのか）を確認し、そこで顕在化する問題としての差別の定義を明らかにする。第二に、それを社会福祉に照らして考えるために、社会福祉の性質、社会福祉と近代化の問題に分けて考える。第三に、近代化との兼ね合いにおいて、アイヌ民族問題における社会福祉の位置を歴史的に検討する際の方向性を提示したい。第四に、歴史的検討の取り掛かりとして、アイヌ民族による言論活動における社会事業観を踏まえる。最後に、提示した視点に基づく歴史研究が今後の方向性を見出す上で重要であること、今後の課題を確認する。

一、顕在化する先住民族問題とその背景の問題

アイヌ民族は日本の先住民族[3]であり、アイヌ民族問題は先住民族問題であるが、この問題の裏側に「侵略者」が存在しているということを、[4]「私は誰なのか」という問いとともにきちんと踏まえておきたい。この問いを等閑視して、アイヌ民族問題について検討を行おうとする際、その問題を解決するために論じているつもりでも、それは対自的でない、という意味において傍観者でしかないと言えるのではないだろうか。[5]もちろん、「私は誰なのか」という問いは筆者自身にも向けているものであって、筆者は自己との対話の中でそれを模索している状況にある。このような筆者がアイヌ民族の生きる知恵、哲学を想像するとき、[6]その大きさや深さをもっと知りたいという思いと、そのような大きな存在を抑圧、抹殺しようとした問題の重さの両者が現れる。そしてこの「侵略者」の存在によってアイヌ民族問題は生起するのであるが、それは以下のような形で顕在化するのではないだろうか。第一に差別意識や言動、第二に、差別による生活上での諸問題、第三により根本的な問題である先住民族としての権利[7]の侵害、以上がそれである。ここで、アイヌ民族問題は近・現代的な問題ということを改めて確認しておきたい。アイヌ民族の世界は、顕在化する問題に限られたものではない。アイヌの文化（生活とともにある文化）、生きる哲学、精神の世界は長い歴史によって培われてきた

ものである。その中ではアイヌ民族問題はその一部でしかない。一部でしかないにもかかわらず、それが何らかの形で強調され、その世界そのものとして認識されてしまう可能性もあるのではないだろうか。これらから、筆者は「差別」を「ある存在をあたかも『ない』もののように扱うこと、[8]或は、ある存在の一部のみを強調し、存在を矮小化した形で固定化しようとすること」と定義したい。こう定義することで、研究を行う上での筆者自身への問いかけとしたい。

二、先住民族問題と社会福祉の関係性への視点

社会福祉とアイヌ民族問題はどのような関係があるのだろうか。社会福祉のどのような性質のために、アイヌ民族問題との関係が生じるのだろうか。顕在化したアイヌ民族問題に照らしてみる。まず、社会福祉は、生活上の諸問題への対応として位置づけられるところから、[9]先に確認した顕在化するアイヌ民族問題のうち、生活上の諸問題へ対応するものとして関係が生じる。また、その問題が差別によって生じたり、増幅されると認識されれば、差別問題に対しても対応するものとして関係が生じるかもしれない。これら両者は「問題」への具体的な取り組みから生じる性質と言えるが、ここでその性質を社会福祉の機能的な性質としておく。それ以外に、前者のような機能的な性質を持つ社会福祉に対して、あるイメージが付与される。利用する価値のある社会福祉に対するイメージや想定されたイメージに基づいたことばの利用をここでは社会福祉が担う構造的な性質[10]としよう。ここで、構造的とは、社会福祉にあるイメージが想定され、利用されることで、現代社会のシステムの中に組み込まれているという意味において用いる。先住民族問題と社会福祉はこのような構造的な性質からも関係性を持つのではないだろうか。社会福祉の構造的性質は、秋辺得平[11]氏による社会福祉、社会福祉研究への疑問を考察することでより明確となる。氏は私に「社会福祉は障壁でしかない」との問題を提起して下さった（後掲の資料を参照のこと）。社会福祉は先住民族が日本で先住権を「獲得」する際に障壁とな

るということ、具体的にはウタリ福祉対策[12]がはらむ問題の指摘である。

そして、先住民族問題と社会福祉を突き合わせて考える際に重要なことに、「近代化」への問い、その中での社会福祉の位置を問うことがあるのではないだろうか。つまり、社会福祉は「近代化」の中で制度化されたものであるため、先住民族問題が社会福祉をも含めた「近代化」に対して批判的な意味を有しているということを念頭に置く必要がある。[13]もしここで、近代以降の社会を無批判に受け容れた上で先住民族問題の議論がなされるとすれば、社会福祉の機能的性質、構造的性質の両者から先住民族問題の検討を行ったとしても、近代からずっと前に存在するアイヌ民族の世界を近代以降に矮小化するという可能性は否定できないし、その結果、アイヌ民族問題が有する現代社会への批判的な意味を削ぎ落としてしまうことになりかねない。さらに上述の自己への問いを欠いた検討が傍観者として人を客体化してしまうことや、[14]「書く」、「語る」という行為に自ずから存在の矮小化という性質が含まれていて、膨大な情報が行き交う今日の状況を鑑みれば、現時点においては、アイヌ民族問題に対する社会福祉研究からのアプローチはいかなる意味においても障壁でしかない、と言っても過言ではないのかもしれない。

以上、社会福祉と先住民族問題の関係を考察した中の、先住民族問題がはらむ（社会福祉も含めた）近代化への批判的性格から分かることだが、今日における先住民族問題への言及には歴史的な検討が重要である。そこで以下に、アイヌ民族問題における社会福祉の歴史研究の視点について考察してみたい。

三、アイヌ民族問題における社会福祉の位置に関する歴史研究の視点

先住民族問題についての議論では、その歴史的検討を欠くことはできない。当時の人々がその時代にあって、一方で支配構造にとりこまれながら、他方でどのような意志を持って行動し、またそれがどのような結果に結びついたのかを

検討することが必要であると考える。「近代化」や、「近代化」において社会福祉が果たした役割を問うことは、社会福祉の機能的な性質と構造的な性質を問うことと全く別々にある問題ではない。ある場において社会福祉が存する際、それら両者は不可分にあるからである。社会福祉の構造的な性質を問うことは、ここでは、近代天皇制の支配構造における社会事業の位置を検討することであり、アイヌ民族問題における社会事業を問うことは、北海道「開拓」における社会事業の位置、同化政策における社会事業の位置を問うことでもある。そしてその問いに答えようとする際には、その場、その時代にあって、生活上の諸問題に対応することを目的として社会事業に関わった人々の思想や事業の一つ一つを検討する作業が不可欠である。[15] それらには、政府による施策の下でアイヌ民族問題に関わった人々、信仰者として社会事業に携わり、アイヌ民族問題に関わった人々など、それぞれの立場による関わり方があったと考える。それらを検討する際に必要なものとして、以下の三点が考えられる。第一に北海道旧土人保護法の実施をめぐる人々の活動、すなわち、顕在化するアイヌ民族問題の生活上の諸問題への具体的な対応やその認識などの検討である。公的な施策として一八九九年に制定された北海道旧土人保護法下で活動した道庁職員や「土人保導委員」[16]は『北海道社会事業』[17]にその論考を寄せている。また、民間の社会事業として、キリスト者、仏教徒による実践、相互の関係性も検討する必要がある。第二に、社会事業に携わる中で、アイヌ民族問題に関心を寄せた人々がそれらをどのように見ていたのか、ということの検討である。社会事業を行う人々のうち、どれだけの人がアイヌ民族問題を認識していたのか、彼らがその問題認識によって何らかの関わりを持とうとしたのか、社会事業が制度化される中で、アイヌ民族問題への対応の変遷にそれらの認識が何らかの関わりを持ったのだろうか。第三に、展開される社会事業をアイヌ民族自身がどのように感じていたのか、ということの検討である。一九二〇年代以降、アイヌ民族による言論活動が活発になる。[18] その中には、社会事業に関する言及もあった。勿論、各々の論者による社会や社会事業の捉え方は異なる。上述の社会事業関係者は、これらのことばをどれほど知っていただろうか。また、それをどのように受けとめていたのだろうか。

社会福祉の歴史研究には、社会事業家として「問題」に関わった人々の思想や事業の研究を行う一方で、人々がそれをどのように受けとめたのかを見ていくことによってその実践を捉え直す必要があると考える。資料は限られてはいるが、その作業への取り掛かりとして、以下にアイヌ民族の言論活動に見られた社会事業への言及を踏まえたい。[19]

四、アイヌ民族の言論活動における社会事業観[20]

アイヌの言論活動の意味について、『ウタリグス』[21]への寄稿者は以下のように示している。

凡そ人の思想と云ふものは、如何に束縛し又押へ様としても押へ切れない、而して又出現せねば止まぬ偉大な力を有するものである。然るに最近まではウタリの意義ある思想や主張も、発表する機関も便宜も得られ無かつたので、従て沈黙の裡にどうにか押へて居たのであった。然るに昨秋ウタリグスが発行さるゝや、実に吾々を救ふ神の降臨かと喜び、且つ感謝したのである。[22]

また、『ウタリグス』や『ウタリ之友』[23]の編纂、発行を担った片平富次郎（一九〇〇―五九）は、これら活動誌について、「勿論他には各大家の名論名説を掲げたものは沢山あるが真心から『ウタリ』を愛し真心からの叫びな（を）持つて居るのは本誌より外にはない」と述べている。[24]このような意義を見出された誌上に、様々な論考が寄せられる中で、北海道旧土人保護法の実施に関わる意見、キリスト者としてアイヌ民族問題に関わったジョン・バチェラーなどに関する言及もあった。それら様々な論者の中から本稿では上述の片平富次郎の論述を中心に取り上げたい。片平は英国聖公会海外伝道協会の宣教師として一八七〇年代末からアイヌ民族に対する伝道と教化活動に従事したジョン・バチェラー宅に住み、指圧治療の業を営みながらバチェラーの仕事を手伝い、後にはバチラー学園の管理・運営に携わり、『ウタリグス』や、『ウタリ乃友』の編集、発行の中心であった。[25]しかしながら、片平富次郎に関する充分な資料や研究

はなく、本稿においても片平の論考の断片を検討するにすぎない。とはいえ、片平自身をも含めた欺瞞性への鋭利な目[26]、環境への視点[27]を窺うことができ、ことばの力への認識を明確にして主張がなされている。差別が意図的に創られたものであればこそ、環境への視点や欺瞞性を見抜く目が必要であるし、ことばの力を意識して述べられた論考であるゆえに、各々のテーマに対する問題意識が強く伝わってくる。筆者が片平に惹かれた理由はここにある。

片平は当時の社会状況を「今日の社会相を以て明日の社会相に赴く可き方向を指示する学者も政治家も思想家もない」と捉え、この中で最も要求するのが、「生活原理を指示する権威ある言葉」であるとし、

（前略）実に歴史あって以来人類渇仰の中心であった基督も釈迦も孔子もソクラテスもプラトンも人類に物質を与へて渇仰されたのではない。只人類に与ふるに権威ある言葉を以つてしたのである。其の言葉が民族の指導精神となり社会の統一が出来そこに人類が生活の原理を見出して居るのである。

実に権威ある言葉は曠野にさ迷ふ人間への指導者の声なのだ。言は人生への光なのだ。暗夜を照らす灯台なのだ。道なのだ。人間に取って之位有難いものはないのだ[28]

と述べている。片平は活動誌を通じて「アイヌを益し社会に益せん」とすることを考えていた。そして、「愚、貧、不潔、大酒の悪口代名詞に、アイヌと云ふ人類代名詞が使用」されている状況の中で、「アイヌとしての天よりの使命もある」として、「今日蔑視しつ、ある彼ら、否同国内にある者を救ひ得ぬ彼らの精神の開発に勤む可きだ[29]」と主張している。そして、当時の北海道旧土人保護法における根本的な問題を和人による「寄生」であると捉え、和人に「保護などの名目のもとに吾人の本能を利用」され、「其内に生活の幾分つ、が削られて」いるとし、「今後吾人は自覚して今日までの保護なる言葉、其方法の裏面に故意に妨げつ、ある事に留意する必要があると思ふ」と述べ[30]、当時の「舵を失つた舟」のような社会事情の中で「真砂の数程」の「社会問題を論ずるもの[31]」を意識してだろうか、

…（前略）…時に一言して置きたいことは、出鱈目に保護だなんて云ふ言葉を振廻すことである之がため、少なからずウタリの自重心を傷づける事を考へて欲しい。同じに其の立場に充分の同情を持てすべきだと思ふ。今日我国にも社会事業が日増し増加して行きつ、ある事は嬉しい事だ。而し其中にもキリストの最も嫌ひたユダヤ人的な行為をなす者が少なくない[32]、が今日のアイヌ種族間には人格を損じてまで保護を受けなければならぬ者はあるまい[33]、

とし、「亡びゆく民族として自滅するか？自力更生の旗を押し立て、侮蔑的保護法を撤廃して立派な国民[ママ]として立つか」とアイヌの「奮起と自覚」を俟たなければならないと呼びかけている[34]。

片平によるこれらの主張を理解する上で欠かせないことの一つに、北海道旧土人保護法制定の前提となる認識を踏まえることがある。北海道旧土人保護法は、一八九三年の加藤政之助による「北海道土人保護法案」、一八九五年の鈴木充美らによる「北海道土人保護法案」の提出などを経て、一八九八年一二月に政府案として「北海道旧土人保護法案」が提出、可決され、一八九九年三月に公布されるが[35]、その制定や実施をめぐる議論においては、アイヌ民族が優勝劣敗という生存競争により、「滅びゆく民族」とされていた[36]。本節で検討した片平による社会事業への批判的見解は、社会事業の機能的性質、構造的性質への見解も含まれており[37]、それらは北海道旧土人保護法の前提としての差別性、それを利用することによる差別の増長の指摘としても理解されるべきではないだろうか。

以上、片平の論説を見る中で、私は三節の第二の視点、社会事業に携わる中で、アイヌ民族問題に関心を寄せた人々がこれらの言論活動をどの程度知り、それをどのように見ていたのか、社会事業が制度化されていく中で、アイヌ民族問題の変遷にそれらの認識が何らかの関わりを持ったのだろうかとの疑問が改めて生ずるのである。

五、今後の課題――アイヌ民族問題における社会福祉の位置

以上、筆者は、顕在化するアイヌ民族問題について考察し、それらを社会福祉の性質に照らし、社会福祉の機能的性質、構造的性質からアイヌ民族問題との関係を提示した。また社会福祉をアイヌ民族問題に位置づける際に、「近代化」そのものの批判的検討が必要であるとし、アイヌ民族問題における社会福祉の歴史研究の視点を提示した。その中で社会事業家による実践を人々がどのように受止めたのかを見ていくことによってそれを捉え直す必要があるとし、その取り掛かりとして、片平富次郎の社会事業観を一瞥した。

社会福祉の機能的性質、構造的性質の検討はそれぞれの場においてなされる必要があることは言うまでもない。それに、時間軸における社会福祉の検討（本稿においては「近代化」における社会福祉の位置をアイヌ民族問題に照らして批判的に検討することを意味する）を加えることは、今後の展開の方向性を見出すことでもある。アイヌ文化振興法の制定によって北海道旧土人保護法は廃止されたが、アイヌ文化振興法の課題は多い。勿論アイヌ民族問題は社会福祉の問題と同じものでもない。現代のアイヌ民族問題において社会福祉の位置を明確にし、今後へ向けて議論していくために歴史の研究が必要とされている。

今後の課題を以下に述べる。第一に、社会福祉の機能的性質、構造的性質、差別の定義、「近代化」など、鍵となる概念を先行研究を踏まえて整理することである。第二に、社会福祉史研究、アイヌ史研究の先行研究のレビューを行った上で、歴史資料を検討することである。第三に、アイヌ民族の文化、生の哲学について学んで行くことである。第四に、これら歴史研究を踏まえ、現代のアイヌ民族問題を検討していくことである。

注

(1) アイヌ文化振興法の問題点については上村英明「二風谷ダム判決とアイヌ文化振興法」『世界』一九九七年六月、二七―三〇ページ。田中了「『アイヌ文化振興法』をめぐる動向と課題」部落問題研究所『部落』51(6)、一九九九年五月、六―一四ページ、他多数を参照のこと。

(2) 例えば、中西直和「オーストラリアの先住民コミュニティにおけるセルフヘルプ・アクション・モデル―ケープヨーク半島アボリジニ自治区での実践分析―」(日本社会福祉学会二〇〇〇年(第四八回)全国大会での発表)や、橋本義郎「北欧先住民族サーメの高齢市民が利用する日常生活支援サービス―スウェーデンのヨックモックにすむ男性市民をめぐる事情についての探求研究―」(『同志社社会福祉学』第14号、同志社大学社会福祉学会、二〇〇〇年一二月、九三―一〇九ページ)がある。

(3) 先住民族とは、「一国あるいは地理上の一地方に、文化や民族の異なる人間が到来したとき、すでにそこに住んでいた人たちの子孫」のことである(土田元子「世界の先住民族問題」木村直司、今井圭子編『民族問題の現在』彩流社、一九九六年、二六二ページ)。また、以下を参照のこと。Office of the United Nations High Commissioner for Human Rights "Fact Sheet No. 9 (Rev. 1), The Rights of Indigenous Peoples" Copyright 1997-2000.

(4) 野村義一、沢井政敏、小川早苗、竹内渉、山崎康弘「アイヌの人権、文化、生活のために(座談会)」大阪部落解放研究所、『部落解放』No.318、一九九〇年一二月、二七―二八ページ。

(5) 筆者はM・ブーバーの「われ―なんじ」の関係性から人と人が対等であるということはどういうことかについて考えてきた。「われ―なんじ」の関係性とは「私」が全存在を以って「あなた」に語りかけるとき、その「あなた」も全存在を以って「私」に語りかけるという双方向的な関係性を言い、両者はお互いが全存在を以って語りかけなければならないほど、はかり知ることのできない大きな存在である、ということであり、この双方向性に対等性が存すると考えている。したがって、自己への問いを欠くということはなんじによる語りかけを無視することによって自己の存在を括弧に入れるということであり、相手と向かいあうのではなくて、「相手」を見るということに過ぎないのであり、傍観者にすぎないということであると考える。

(6) 筆者は現時点で、アイヌ民族の文化について詳しい知識を有しているという訳ではない。知里幸恵『アイヌ神謡集』(岩波書店、一九七八年)や朝日新聞アイヌ民族取材班『コタンに生きる』(同時代ライブラリー166、岩波書店、一九九三年)を読

み、秋辺得平氏の講演を聞き、釧路市春採のコタン祭でのカムイノミでの祈りのことばを聞いて（理解しているわけではない）、それを想像しているにすぎない。

（7）先住民族の権利については、現在、国連先住民作業部会にて草案を検討しており、その中には民族・文化的独自性とアイデンティティの維持・発展、ジェノサイド、エスノサイドから守られる権利、文化・知的財産権の保障、伝統的経済構造と生活用式の維持、自己決定権などが含まれている。注（4）の "Fact Sheet No. 9 (Rev. 1), The Rights of Indigenous Peoples" を参照のこと。

（8）このことについては奏得子氏の話に賛同し、援用させていただいた。

（9）ここでの生活上の問題とは、嶋田啓一郎による社会福祉の定義をもとに、「社会生活上の基本的欲求を巡って、社会関係における人間の主体的および客体的諸条件の相互作用より生起する諸々の不充足あるいは不調性」としたい。嶋田啓一郎の社会福祉の定義は以下の通り。「社会福祉とは、(1)その置かれたる一定の社会体制のもとで、(2)社会生活上の基本的欲求を巡って、(3)社会関係における人間の主体的および客体的諸条件の相互作用より生起する諸々の不充足あるいは不調性に対応して、(4)個別的又は集団・コミュニティ的にその充足・再調整、さらに予防的処置を通して、諸個人、集団、コミュニティの社会的機能を強化し、(5)社会的に正常な生活標準を実現することによって全人的人間の統一的人格を確保し、以って基本的人権を確立しようとする公的および民間的活動の総体を意味する。（嶋田啓一郎『社会福祉の思想と理論』ミネルヴァ書房、一九八〇年、三―四ページ。）

（10）ここで「機能的」とは、「ある対象に固有の働きや役割」、「構造的」とは「部分と全体の関係」という意味で用いており、社会学や文化人類学での機能主義、構造主義、構造―機能主義、或いは社会福祉学におけるそれらの議論を踏まえているわけではない。

（11）北海道ウタリ協会理事、北海道ウタリ協会釧路支部長、ヤイ・ユーカラ・アイヌ民族学会会長などの役員を務め、著書に『近代化の中のアイヌ差別の構造』（共著、明石書店、一九八五年→新版一九九八年）や「アイヌは敵を探してはいない」（『朝日ジャーナル』vol.23、No.27、一九八一年七月三日）などがある。

（12）一九四六年の生活保護法の制定によって北海道旧土人保護法の第四条と第六条が削除されることで、北海道旧土人保護法の一部が社会福祉法制の中に統合されたが、アイヌ民族の経済生活上の問題が明らかになったことによって一九七四年から七ヶ年計画で北海道庁が主体となって行っている施策で、現在は第四次ウタリ福祉対策を実施中であり、第五次対策に向けて

検討会議が行われている。第四次ウタリ福祉対策の施策体系は以下の四つである。第一に文化の振興、第二に教育の充実、第三に生活の安定と産業の振興、第四にアイヌの人たちの理解促進、以上がそれであり、この体系に基づいて様々な事業が展開されている。しかしながら、ウタリ福祉対策の問題点も多くが指摘されており、これらの詳細な検討が必要とされている。

(13) 近年、社会福祉研究においても「ポストモダン」ということばが見られるようになるとともに、「近代化」の再検討の必要性が指摘されつつあるが、社会福祉の歴史を踏まえた上での議論はまだ緒についたばかりといえよう。

(14) これらの問題点についての批判が行われているということについては、小川正人『近代アイヌ教育制度史研究』(北海道大学図書刊行会、一九九七年)の序を参照のこと。本研究においても差別を問題とするのであるが、この問題によって筆者は研究ということの意味を改めて考えさせられている。

(15) 勿論、残された資料は、実際に展開された人々の関わり合いの一部でしかないという限界はある。

(16) 一九二三年に道庁がアイヌ民族の「保護救済」を目的として設置した制度(一九三二年の救護法の施行により方面委員に統合)で、その設置規定によると、アイヌ民族の戸数が十戸以上の市町村に置かれた。委員には市町村吏員、警察官吏、教育関係者、医師、聖職者、篤志家、社会事業家が支庁長市長の推薦で道庁長官が嘱託した。実際に担当した委員に吉田巌を挙げることができ、その日誌は帯広市教育委員会などから出版されているが、関係資料も帯広図書館で整理されつつある、ということである。このことに関しては小川正人氏に助言を戴いた。

(17) 『北海道社会事業』は、大正十一年五月、当時の道内社会事業の連絡統制機関として北海道慈善協会を改組して、道庁内に設立した全道団体の会報として、必要止むなきに促され創刊を見たもので、」(KT生「『北海道社会事業』誌回顧」北海道社会事業協会『北海道社会事業』百十八号、一九三二年五月号、四〇ページ。)とある。『北海道社会事業』については、北海道社会福祉研究会『「北海道社会事業」総目録』(北海道社会福祉研究会準備委員会、一九八九年)を参照のこと。

(18) 活動の状況などについては、小川正人、前掲書、三〇七―三三七ページを参照のこと。

(19) 筆者は、この作業で重要なことに、アイヌ民族の文化についてもっと知ることがあると考える。アイヌ民族の文化を知ることそのものが近代化への問い、社会事業への問いであると考えている。

(20) 以下に検討する中で北海道旧土人保護法に対する見解を社会事業観として記述することとなるが、注(31)の引用ヶ所に見るように、社会事業と北海道旧土人保護法が共に論じられたこと、北海道旧土人保護法が社会事業とされていたこと(「旧土人

保護施設改善座談会」『北海道社会事業』第四十二号、一九三五年（月は不明、四十三号は一一月号）などを参照のこと）をもとにしているためで、筆者は「アイヌ民族問題＝社会福祉の問題」として捉えるつもりはない。

(21) 『ウタリグス』は英国聖公会海外伝道協会の宣教師として一九七〇年代末からアイヌ民族に対する伝道と教化活動に従事したジョン・バチェラーを団長とする「アイヌ伝道団」の機関誌で、一九二〇年一二月に創刊されたということである。小川正人、山田伸一編『アイヌ民族　近代の記録』草風館、一九九八年、六〇三―六〇四ページを参照のこと。本稿でのアイヌ民族の言論活動の引用は同書のものであり、以下の引用ヶ所については、雑誌名、号数、発行年月日、同書のページ数で表す。

(22) 有珠明石北洲生「雑感」『ウタリグス』第七号、一九二一年九月二九日、一一〇ページ。

(23) 一九三三年一月に創刊され、『ウタリグス』の実質的な後継誌と言ってよいとされていて、終刊時は不明ということである。小川、山田編、同前書、六〇五―六〇六ページを参照のこと。

(24) 片平野風「本誌創刊の一週（周）年を迎へて」『ウタリグス』第八号、一九二一年一二月一〇日、一一八ページ。

(25) 小川正人、山田伸一編『アイヌ民族近代の記録』（草風館、一九九八年）の六〇三―六〇六ページを参照のこと。

(26) 「政治家などが、宗教を利用して臣民の思想統一を計ろうと、自己を欺き、且つ他人を欺き、宗教々々と道具にかつぎ廻り、宗教家などと、物の理もろく様わからぬ者共が、食ふために自己を欺いて、教を宣布して居るのが現日本の宗教で、危険も之れ以上なことはない」（片平野風「社会の不安は宗教問題の解決によりて消失する」『ウタリグス』第七号、一九二一年九月二九日、一〇七ページ）と主張し、これらの論述に対する内務省警保局から注意を受けたことに対して、「兎も角現代の社会生活に虚偽や矛盾のある事は此社会に魔（麻）酔し切つた人間でない以上、何人も気の付く所である気が付ても胡麻化して呑気にして居ることは自分には出来ない事だ」（片平野風「本誌創刊の一週（周）年を迎へて」『ウタリグス』第八号、一九二一年一二月一〇日、一一八ページ）と述べている点がそれである。

(27) 片平野風「同じ麦でも肥たる土地に蒔のと石の上に蒔ので非常な違がある」『ウタリグス』第六号、一九二一年八月四日、九六―一〇一ページ。

(28) 片平野風「ウタリの間に言葉なきや久し矣　あ、待望さる、言葉よ」『ウタリ之友』二月号、一九三三年二月一五日、一七六ページ。

(29) 片平富次郎「年頭に苦言を掲げて吾人の自覚を促す」『ウタリグス』第一巻第二号、一九二一年一月二〇日、八二ページ。

(30) 片平富次郎「年頭に苦言を掲げて吾人の自覚を促す」『ウタリグス』第一巻第二号、一九二一年一月二〇日、八一―八二ページ。

(31) 片平野風「社会の不安は宗教問題の解決によりて消失する」『ウタリグス』第七号、一九二一年九月二九日、一〇六ページ。

(32) 片平によるこの記述については、当時の日本のキリスト教界やバチェラーのユダヤの人々に対する見解を踏まえる必要があるだろうが、筆者は現時点でそれらを検討できていない。

(33) 片平之風「本誌創刊一週年を迎へて」『ウタリグス』第八号、一九二一年一二月一〇日、一一八ページ。

(34) 片平富次郎「自力更生を叫ぶ秋　ウタリ青年の自覚を促す」『ウタリ之友』創刊号、一九九三年一月二〇日、一六八―一七〇ページ。

(35) 明治政府成立以降の北海道旧土人保護法制定への経緯の概要について以下に述べる。一八六九（明治二）年の天皇の「御下問之写」において、同化政策の必要性が軍事的要請との関連において述べられ、当面の対策として士族を要件とした屯田兵を北海道に配置し、「北門」を固める目的に即応するとともに、それまで蝦夷地と呼ばれた島が北海道と改称され、一八七一（明治四）年の戸籍法の公布に際し、アイヌ民族を「平民」として編入すべき旨が開拓使によって布達されることで、彼らは「日本の民」とされた。さらに一八七二年の「北海道土地売貸規則」と「地所規則」、一八六九（明治二）年以降の移民の増加、一八八六（明治一九）年の北海道庁の設置によって、北海道への資本の移住が方針とされ、北海道土地払下規則（一八八六年）と北海道国有未開地処分法（一八九七年）により、アイヌ民族の生活の場がそれまで以上に急激に破壊されていった。以下を参照のこと。榎森進『アイヌの歴史』、三省堂、一九八七年。石田雄「『同化』政策と創られた概念としての『日本』」（上）『思想』892、一九九八年一〇月号、岩波書店、五六―五七ページ。

(36) この点については多くの先行研究があるので、議会の審議については、ここで一瞥するにとどめる。例えば加藤政之助は「我々は好し北海道の『アイノ』人種は劣等な者であるので、前途絶滅する者と致しましても、日本国民の義侠心より致して彼等を救ひ、彼等を保護すると云ふことは多少なさねばならぬ」（『第五回帝国議会衆議院議事録／一八九三年一二月四日』北海道ウタリ協会アイヌ史編纂委員会『アイヌ史資料集3　近現代史料(1)』北海道出版企画センター、一九九一年（以下、単に「資料3」と表す）、三二ページ。）とし、また一九〇一年度の歳入歳出案の会議において、北海道旧土人保護費に国庫と地方費のどちらを充てるかという審議が行われるなかで、白仁武は国庫を充てるのが良いとし、その理由として加藤政之助と同様の歴史的経緯を挙げる。けれどもその際に、府県のものが「優秀劣敗」で以ってアイヌ民族が共有していた山河を

自己のものとしたことを根拠としていた（「第十五回帝国議会衆議院予算委員会第一分科会会議録／一九〇一年三月一八日」、資料3、一一三ページ）。

このような認識は、道庁による調査報告においても見ることができる。以下を参照のこと。北海道庁「北海道旧土人」一八九九年、二〇―二一ページ、河野本道選『アイヌ史資料集』第一巻　一般概況編、北海道出版企画センター、一九八〇年（以下「資料集①」と表す）。北海道庁「旧土人に関する調査」一九二二年、一〇九―一一三ページ、資料集①。

(37) 片平富次郎の社会事業への見解について、小川正人氏からジョン・バチェラーとの関わりの検討が不可欠であるとのご指摘を戴いた。今後の課題である。

《付記》
本稿は本学大学院研究科岡本民夫教授のご指導により執筆し、ご校閲を受けて作成したものであり、ここに感謝いたします。

〔資料〕秋辺得平　アイヌの文化・歴史と日本社会

今日のアイヌ民族問題と社会福祉の関わりは、アイヌ民族への「総合的な福祉対策」として、一九七四年から道庁が主体となって行っているウタリ福祉対策（七ヵ年計画、現在第四次）がある。これらの検討を行う際に必要な視点を得るために、同志社大学大学院社会福祉学専攻社会政策研究会の研究交流会として、「アイヌの文化・歴史と日本社会」（二〇〇〇年一一月二五～二六日）を開催することとなった。本稿の考察を行うにあたって、筆者は秋辺得平氏の講演から多くの示唆を得たため、以下に資料としてまとめた。秋辺氏は北海道ウタリ協会理事、北海道ウタリ協会釧路支部長などの役員を務めるほか、著書に『近代化の中のアイヌ差別の構造』（共著、明石書店、一九八五年→新版一九九八年）などがある。

「一、アイヌの世界とアイヌの言葉」での秋辺氏による自己への問いは、筆者自身への「私は誰なのか」という問いの必要性を改めて促すものであったし、それを歴史的に考察することの重要性は「二、アイヌの文化史」において示されている。さらに、その歴史を見る中で、社会福祉が制度化されることの意味について、「三、アイヌの歌と踊り」の中の、「本当の豊かさとは何か」という問いかけから考えさせられた。また、アイヌ民族問題への社会福祉研究からのアプローチにおいては、「生活上の諸問題」、差別の問題の検討や、社会福祉のイメージが利用されることの認識が不可避であることを考えさせられたが、秋辺氏の講演全般に示されたアイヌの文化の魅力から、差別の事実を取り上げ、その不当性を主張するのみでなく、アイヌの文化そのものの素晴らしさから差別への問いを行うことの重要性を考えさせられた。これらは、本稿の作成に欠くことのできないものであった。

一、アイヌの世界とアイヌの言葉

――秋辺さんのこと、アイヌと日本人とへの探求――

アイヌの言葉とアイヌの世界というテーマで話をするということになっていますが、私が今日ここに存在しているということ、私自身が現に生きているということ、身近なことを私自身のテーマとして、京都で食べたにしんそば、京都の被差別部落、中国残留孤児、長老のことなどの思い出したことを話させて戴きます。

私の父は成田萬九郎という和人で、青森出身ですが、北海道函館に居を構えていました。もうすでに亡くなっていますが、昭和初期に国後・択捉・歯舞の魚場開拓で舟細工として働いていました。成田には妻子がありましたが、二周り年が違う母秋辺ミサホを現地妻としていました。私は母方で育ちましたが、そういうことが詳しく分かるようになったのは、私が中学生のころでした。母は成田性を名乗っていませんでしたが、子どもたちは成田の姓でした。けれども私

は父方には一度も訪ねたことがないし、父方の家族とも会ったことはありません。私は長いこと成田姓を名乗っていましたが、第二回全国アイヌを語る会で私が「みんな自分の故郷へ帰ろうよ」と呼びかけ、私自身も釧路へ帰ることとなり、秋辺という名字へ戻りたいと想うようになりました。私の自宅は今でも札幌にあるのですが、当時は北海道の中心都市である札幌にアイヌの若者や活動家が集中していた時のことです。ですから、秋辺という姓に戻る以前は成田という姓を名乗っていて、『近代化の中のアイヌ差別の構造』（明石書店、一九八五年→新版一九九八年）は成田得平という名で出版されています。私のカミさんは広島県の出身でして、結婚して三十年になりますが、デパートで木彫り製品を売っている時に知り合いました。私には娘が三人いまして、末の娘は竜谷大学で教育学を専攻しましたが、焼鳥屋の店長と結婚しまして、専攻した教育学を社会で活かしているわけではありません。二番目の娘は一年発起して、英語を勉強すると言ってオーストラリアへ行きましたが、現地の人と結婚して今はオーストラリアにいます。長女は札幌に居住していまして、時々、私の携帯電話にメールが入ってきます。

私はこの通り日本語ペラペラで、アイヌ語は勉強中です。「アイヌに戻りたい」という意識をここ二十年くらい持ってきました。高校生の時に初めて私がアイヌであるということを授業中に思い知らされまして、人文地理の教科書に世界の人種分布の地図で、黒人・白人・黄色人種という三つの区分けがあり、東洋は斜線であったのに、北海道が白糸だったのです。それを生徒が見つけて、ミスプリントかと先生に質問したら、先生はアイヌは白人だから間違っていないと答えたんです。するとその生徒が「アイヌは色が黒いのに何故白人なんですか」と言いながら私を見たんです。それが大変ショックでしてね。アイヌは白人かどうかということに関してなんですが、コーカソイド説というのがありまして、アイヌは白人に近いという説をとる人があり、今から三〇年前の高校の社会科ではそういうことを教えていたんです。自分は白人ということを聞きまして、日本人に対して優越感もあったんですが、現実には差別はあって、はかない抵抗だったのかな、と思います。そのころはアイヌに戻りたいとは思っていませんでした。それ以降、何故自分はアイ

ヌなのか？ということを考えまして、日本人にさせられているという状況が少しずつ分かって来るようになりました。母方の祖父母は日常はアイヌ語で会話をしていたけれど、私たちが近づくと日本語しか話さないんですね。明治政府による強制的同化政策によって、孫はおろか自分の子供にさえアイヌ語を教えることを絶対しませんでしたよ。けれども、祖父母はアイヌだということを私は知っていましてね、私が五歳くらいの時、熊祭もしていましたしね、祖父は長老で彫刻もしていたし、祖母は刺繍、歌や踊りをしていまして、全くのアイヌでした。私も私の母もアイヌ語はしゃべれないし、日本語をしゃべって、日本の教育を受けました。これは早く日本人になれということか？と考えました。

私は高校は定時制に行っておりまして、昼間は公務員（社会人）をやっていて、労働組合に関心を持っていました。だから思想的には未だに左派なんですけどね。当時釧路市は長い保守政治から社会党市長が誕生しましてね、山本武雄氏（社会党系）が市長になったんです。山本氏は、市役所の給仕職を市民から公募した最初の市長でした。それまではアイヌが市役所に就職することは考えられなかったんです。全部縁故採用でね。「アイヌでも市役所に入れる」というので人気者になりました。当時は大変なことで、アイヌの仲間から羨望の眼で見られました。当時はアイヌが嫌でね、観光地に行けばアイヌを売り物にしているし、これは今でもそうなんですが、観光地の阿寒には行きたくなかった。

私は推薦入学で東京理科大の二部へ行くことになったのですが、挫折してね。その頃東京に兄がいて、彼は芸術活動をしていたのですが、その個展の手伝いをすることになったんです。いつしか岡山市に兄が行った時にはデパート中心の手伝いをしまして、実際には、木彫りのペンダントを作っていたんですけどね。その二年後に民芸品屋さんになったんです。そして釧路に戻って観光の仕事へ就いてね、阿寒へ行くことになって、そこで五年働いて、オリンピックを契機に札幌へ行くことになりました。そうして観光地の仕事をしたり、兄の仕事を手伝うなかから自分の再発見をしようと思いました。「自分とは何者なのか」ということを確定したいと思いまして、金田一京助のユーカラ全集を古本屋で四、五百円で買ってね。古本屋と言ってもアイヌの書物はほとんどない時代でして、当時アイヌに触れるということは

難しかったのですが。いわば、「徹底してアイヌをやめたい」という思い、「立派な日本人へなればいい」という思い、それでは「アイヌって何なのか」、「日本人って何なのか」、この両者を探る作業が人生の大半を占めているわけです。まあ、私自身収入を得て食べなければならないので、日々の暮らしに追われながら自分の仕事とアイヌの文化を見つけ出す作業をしているんです。

ヤイ・ユーカラ・アイヌ民族学会というのがありまして、私は今も会長をやっているんですが、ある時日本民族学会と日本人類学会が札幌で大会を行っていまして、その会へ「なぐりこみ」へ行ったんです。太田竜の新左翼の活動時代でね（私は太田グループではない）、山本多助さんという長老とグループを作ってその学会へ行きました。その時は、アイヌがメインテーマの大会だったんです。その前に北海道で大会があった時は、河野常吉らが「アイヌは人食い人種か」という議論を行ったのですが、その二十年後に再び北海道へ学会開催が帰ってきたんです。私たちは、学者はアイヌをどのように研究しているのかが見たくて行ったんです。行ってみて「学問ってこういうものか？」と思いましたね。大学へ行っていたら自分もこうなっていたのか。情けない。どういうことが情けないかといいますと、重箱の隅をつつくような研究しかしていないんです。ある人はマキリという小刀の先がなぜまがっているのか、ということを研究していました。アイヌの研究をするというのはこういうことか？こんな研究が何故必要なのかと思いました。また形質人類学の人はアイヌがいるとしゃべりにくいようで、アイヌのことを「アイヌさん」って言うんです。そうしたら山本多助さんがね、「アイヌさん、アイヌさんって、あんた何さんだ？」って聞いたんですけどね。私は一方では、アイヌ解放同盟の結城庄司さん、太田竜さんと行動を共にしていたんですが、学会を糾弾して、シンポジウムで壇上宣占をしたんです。そのシンポははちゃめちゃになっちゃったけどね。その時私たちの結論として、アイヌのことを研究するのに学者にまかせておけない。自分たちで研究しようといって、ヤイ・ユーカラ・アイヌ民族学会を作ったんです。学会といっても、アイヌの長老を招いて、昔のアイヌの話を聞いて、アイヌってそういうものかということをアイヌ自身が勉

強するというものでした。そうしたら面白いことがいっぱいわかってきた。

最近のことですが、私が民族衣装を着用してデパートの物産展で民芸品を販売していたところで、珍味を売ってた人だったかな、どこから見ても、あの人「アイヌ」だな、目はぱっちり眉は黒く美しくてね、和人ではない、どうみても「アイヌ」だなっていう人がいたのですがね。けれども言葉は交わさないんだね、向こうも避ける。「北海道物産展でアイヌと出会っちゃったなぁ」と思って避けたいんだろうね。北海道のデパートで販売員にアイヌ出身者がいても、自分がアイヌだと名乗る人はいませんよ。どうだろう、実際に北海道で名乗る人は少ないんじゃないかな、釧路にはアイヌ出身者が数百世帯、二、三千人いるなかで自分がアイヌと名乗る人はどれくらいいるだろうか。釧路の人口は二十万くらいなんだけどね。二、三十人、下手したら十人。上野千枝子さんもウタリ協会に入って十年くらいですが、それまでは絶対に自分はアイヌって名乗らない人でしたしね。みんなアイヌをやめたくて、日本人になりきろうとしていたんです。そういう政策の下に生かされてきたので名乗らなくて当たり前、名乗れるような状況ではないのですから。

私がここに来る直前の一一月三日にね、釧路市文化奨励賞を八重清次郎さんが受けることになったんです。私は文化勲章とかそういうの嫌いなんだけれど、我が長老がうけたので行ったらすごいのね。君が代は歌うし、日の丸も掲揚して、釧路市の歌も歌って、市民憲章を斉唱して…。もらった文化奨励賞や銀縁の賞状もすごかったけどね。八重清次郎さんは北海道東地域では最後の長老と言われていて、マリモ祭でもどこでも行く人なんですけどね。彼は和人なんです。和人の開拓者の子で赤ちゃんのときにアイヌとして育てられて、アイヌの長老をやっているんです。本人は自分を根っからアイヌだと思っていて、血は入っていなくても、真剣にその信仰をもっているんです。

八重さんは、普段はどもるんだけど、アイヌ語の時はどもらない。文化奨励賞の挨拶で、皆五分くらいで終るけど一人だけ二十分、延々としゃべるんです。自分がこの賞をもらったのは母のおかげで、この賞を母にあげたいって泣きながらにしゃべる、感動の挨拶でしたよ。アイヌに育てられたのは自分だけでなくて、たくさんいる。だけどアイヌから

は和人のくせにと言われ、シャモからはアイヌとバカにされ、もんもんと暮してきた。でも自分はアイヌでそれを辞める気はない、感謝しているってね。

現在、中国残留孤児の帰国がよく報道されていますが、中国でも日本の関東軍、開拓民は中国人をいじめましたね。日本人にひどいことされたのに、中国人が日本人を育ててきましたね。北海道でも和人にいじめられたのに、和人の子をアイヌが育ててきました。けれども、北海道では和人がアイヌの子を育てたという話はありません。これらを見たときに思うのは、日本人ってなに？こういう日本人にはなりたくない。アイヌがだめで、アイヌをやめて本当に日本人になりたい、という像がない。追求すればするほどない。

今日（一一月二五日）、京都へ来たのですが、京都は観光客が多いですね。京都に何しに来るんだろうと思いますね。それは寺社仏閣で、モノを見に来る人が多いのではないでしょうか。心を見ているのでしょうか。モノを見るとは何なんだろう。できれば、本当は内面を見て欲しいのです。日本人は外見を見て、外見上とりつくろうのが好きなんでしょうかね。皆京都に憧れて、小京都というのを造るでしょう。自分たちの文化が「低い」と思っているのでしょうか。日本文化は京都が中枢なのかね。寺社仏閣という構造物、世界一の木造建築と言ったって、庶民は奈良の東大寺に住んでいましたか？まして被差別部落の人はどうでしょう。実は北海道でも部落差別があります。開拓で入った被差別部落の人を神社の宮司が差別していたことを、宮司ご本人から私は聞きました。その宮司によれば、彼らは境内に入ることはできるけれども、祭りに直接携わることはさせない。このような一般和人のプライドは何なんでしょう。京都は国際観光都市と言われますが、京都とは、日本人とは何だろうか。アイヌや中国人は日本人育てるけれど、アイヌや中国人を育てる日本人はいるんでしょうか。地名総監で人を差別するような、そんな日本人にはなりたくない。とはいえ、松浦武四郎や安藤昌益はアイヌに高い関心を持っていたそうですが。私は、『朝日ジャーナル』で「アイヌは敵を探してはいない」（vol.23、№27、一九八一年七月）という文章を書きましたが、それは本音ではあるんです。でも和人

と闘ってみたい、やっつけてみようと心のどこかでは思いますよ。

けれども今こうして同志社大学で話をし、耳を傾けてくれる人たちがいるということは、日本が民主主義を取り入れてわずかに五十年と少しだけど、こういうことができることができるまで五十年、まだ始まったばかりということを考えれば、私が和人や白人と敵対しても仕方がない。最終的には広い視野で人間を見るべきで、それは伝統的にアイヌ自身が持っていた考え方なんです。そっちを見た方がいいと思いますね。

摩周湖の観光用パネルは変でね、観光協会に抗議したんですけどね、酋長ということばを使っているんです。酋長ということばはアイヌ語ではなくて、日本語でね、辞書には最近はなくなっているんですが、酋長という用語を日本人に対しては使わない。アイヌやインディアンに対して、「野蛮で未開な土人の長」という意味で使うんです。「野蛮で未開な土人の長」なんてどこにいるのかと問うても、辞書を出版している会社の人は誰も説明できないですよ。酋という文字は中国語が語源で、酒造りの長という意味だそうですが、小集団の長という意味で使われるようです。好意的に使う人もいるようですが、いずれにせよ、忌まわしいことばはなくしましょうよ。

その観光用パネルでね、摩周湖の伝説を展示しているのですが、全くの「他人事」としてしか扱っていないんです。「昔アイヌがおったとさ投げた槍の着地が摩周湖だったとさ…」地元の話としてプライド高く書けばいいのにどうして「他人事」にするのか、それだったら止めて欲しい。摩周湖の観光はアイヌに托して、あなたたちは身を引きなさい、と思いますね。観光協会に抗議したら近くに書き換えたいとのことですが。

私はそのパネルではむしろ、自然科学的な摩周湖の形成過程に興味がありましたね。摩周湖は火山の噴火によるカルデラ湖で、三千年ほど前に噴火口に水がたまってできた。噴火した時アイヌの先祖が住んでいたわけでしょう。アイヌがそれを見ていたわけです。雄阿寒、雌阿寒が噴火して、国後島の爺爺岳、摩周岳も噴火して。ものすごい噴火だったんじゃないかと思うんですよ。アイヌはそれに物語をつけたわけでしょう。そのころのアイヌってどんな暮らしをして

いたのか、とても興味があります。青森県の三内丸山遺蹟を彷彿とさせますね。縄文海進の後、四千年前に集落を作っていたのですが、食べ物がすごい。小魚や小動物はほとんどとらない。畳一枚くらいの大きさのヒラメを獲っていてね、そんなヒラメがあったら、一集落が幾日も食えるんです。鯨とかヒラメとか、出土する骨格から、そういうものを食べていたのでしょう。カナダインディアンもそうね、千年前から二千年前はやっぱりヒラメでね、その頃はカレイのメチャクチャでかいのがわんさかいたんです。それを槍で獲るんだからすごいですよ。だから文学を生んで、物語を生むんですね。着物だってそれぞれが十枚、二十枚持っていた。とても豊かだったんです。摩周湖の噴火をみた擦文期の人々は非常に豊かだったんですよ。だから観光協会はこういう歴史を他人事としてではなくて、自分たちのこの地の先住者がもっと雄大な、大きな自然に抱かれて暮していたということを言えばもっと面白いのに、北海道開拓の時の苦労話とか、姑息なやり方しかしない。歴史を見るときに、自分が直接そこの土地に関わっていること、自分は何なのかということを振り返る作業を輝かしく、豊かに見て欲しいのですが、しないんです。京都の祇園祭りの山鉾にかける錦織りは蝦夷錦といって、北からのものです。アイヌが大陸交易で手に入れたものなんです。京都にはニシンそばがあるでしょう。あれ、京都に来て初めて知ったんですけどね、京都にはニシンの文化、昆布の文化が染み込んでいるでしょう。湯豆腐も美味いね。だしの取り方、昆布の使い方、柚子の使い方も上手ですね。京都で使われる昆布は、利尻、羅臼昆布で、これらはだしをとっても濁らない昆布なんです。東北は真昆布、長昆布を使うのですが、これらは濁る昆布です。沖縄はもっとやわらかい昆布を使うんです。モノの流れ、ヒトの流れは面白いでしょう。日本史は、北からの日本史も南からの日本史も面白いのですが、北からの日本史はこれまで日の目を見なかったんです。もっと日の目を見ていい。今回のテーマは「アイヌの言葉とアイヌの世界」ですが、今のようにアイヌの世界が限定された北の蝦夷地だけのものでもなくて、結構広いものだったんです。

アイヌはイタオマチプという海洋船を持っていました。丸木舟は湖沼・河川など内水面のものだったのですが、海洋

は丸木舟に板をはりあげたもので、今から二百年くらい前までは持っていたんです。それでカムチャッカや沿海州、青森、秋田、岩手まで交易をしていました。イタオマチプは和人との関係で早めに消えましたけど。漁船のルーツは今でも青森、北海道の南の函館や渡島半島で、アイヌの舟の原型をとどめていたものが造り続けられていたということが最近わかりました。青森では、モジップということばがあります。モジップとはアイヌ語で小船という意味なのですが、それが今まで残っていて、それを知らないで使っているのです。青森、陸奥や三内もアイヌ語です。地元の人はアイヌ語ということを言わないですけれど。言われたくないのでしょうか。梅原猛さんがアイヌに関心を持っていてね、「大和は国のまほろば」の「まほろば」は今でも意味不明なのですが、彼はこれがアイヌ語だというんです。マというのは本当にという意味で、ホロッパッというのは広いところの頭という意味だそうです。「本当に広いところの頭になるもの」という意味になるそうです。梅原さんは祭りにも関心があるようで、能登半島に海草と鬼の面をかぶってする踊りがあるでしょう。あれはアイヌだって言うんです。秋田の男鹿半島のなまはげもナマパケと言って、「鬼がきたぞ」という意味。大体日本海側では鬼をアイヌにしているのではないか、と梅原さんは言うんです。青森の弘前にねぶた祭というのがあるでしょう。ネプタはアイヌ語の意味は、英語での疑問詞 what という意味です。祭りの掛け声では「ラッセ、ラッセ」というんですが、それはアイヌ語では「けおとす」という意味。青森の地元の郷土史家に聞いたところでは、ねぶたは蝦夷征伐のときのチャシでの戦いが起源になっていたそうです。こけおどしに張子をつくって蝦夷軍をおどかしたというのが祭りの発端だそうです。まあ知っているのはごく一部の郷土史家で一般市民は知らないでしょうけれど。ですからねぶた祭は戦勝の祭りで、地名に限らず祭りも含めて東北はアイヌと直結していた、ということになります。地名に関しては、金田一京助によって「アイヌ語の地名は衣川を下らず」と言われていました。衣川というのは蝦夷征伐の決戦の地なんですが、最近は日本地名学会で、関東にまでアイヌ語に由来する地名があるということが認められつつあるそうです。朝日新聞社が出している『東京地名孝』（一九八六年）にはアイヌ語由来説がいっぱい出て来

るんですよ。

そういえば、平仮名や片仮名は平安時代に日本人が発明したと言われていましたが、最近違うのではないか、その発明が韓国らしいということが言われていまして、そうだとすれば、韓国と日本の文化は想像以上に深い絆で結ばれていたということになりますね。これからもっともっと歴史学、考古学、社会学など、色々なものが新しく解明されて、本来の人間の有り様に近づく解明がなされるのではないでしょうか。

私は大学が好きでね。最近まで北海道の東海大学で現代文明論を年に一回全学年を対象にしたものを受け持っていたんですよ。学生たちが将来日本を背負う、実際にはたくさんの市民が背負っているのだけれど、特に知識の面においてね。豊富な知識を整理して、いろんな情報を整理していく。いわば交通整理していくというのは学者の役割でしょうね。今科学的にもどんどん歴史が解明されているというのは本当に面白いですね。特に注目しているのはＤＮＡの研究。ＮＨＫで放映していたのですが、ＤＮＡ鑑定によってアイヌＤＮＡに最も近いのが中米の先住民族らしいということを言っていまして、大変な驚きでした。日本人に最多のＤＮＡは朝鮮民族のだそうですね。次が中国、アイヌのＤＮＡ。だから日本人のルーツは朝鮮民族や中国なんでしょうね。

アイヌと沖縄は近いのではないか、と思います。とても親近感が湧くんです。単に顔だけでなく、信仰からも近いものを感じるんですが、まだまだ解明が必要ですね。日本列島でいえば、私は縄文後期から渡来人が現われる直前までの日本の歴史に興味があります。地名では縄文海進のころの地名やその頃の人の移動はどうだったのかということに興味がありますね。

私はアイヌとして、自分自身が求めて来たアイヌ像は何かを求めるとき、現実にアイヌの伝統的な儀式を長老から受取って今後も続けていきたいと想うときに、ベースになっているものは自然界の中で人間も自然の一部でしかないということ、謙虚に自然の一員として生きていくということがアイヌの宗教観の基本になっているということ、これがとて

も大切で、それなしにアイヌの伝統的な儀式はありえないと思います。歌や踊りもそうです。人間が自然界のあらゆるものに対して神々を認識してそこに自分が存在するということですね。しかし、それでいて人間は欲深いものであり、そこにより注目したのが世界宗教の仏教、キリスト教などの世界ではないでしょうか。アイヌの宗教はそれ以前の宗教なんです。アメリカやオーストラリアの先住民族に親近感も覚えますし、沖縄もそうです。支配者が現われて人が人を支配して搾取する、より富を手にしようとする欲望が欲望を生んだ時代が日本では中世、古代から中世に入るころではないでしょうか。人間が欲にかられて社会で支配構造を強めて、モノや社会をつくりあげる中で人が人を踏み台にして、より多数の人間を食い物にする、それを精神的に元に戻そうとするのが宗教だったのではないでしょうか。人々を救う仏教の聖人、釈迦、親鸞、法然を見れば、人を踏み台にして富を得るような社会での踏み台にされた人々の救済を行おうとしたのではないでしょうか。それらとアイヌ社会は時代が違う、歴史的背景をおさえることが大事です。仏教やキリスト教を敵にする必要はありません。アイヌがアイヌとしての社会を保持してきたのですから。そうではなくて輝かしい時代のアイヌを見てみたい、アイヌ文化に一度立ち返ってみたいという強い思いがありまして、今後のポイントはそこにあるのではないかと思います。この百二十年の同化政策、宗教も和式化され、日本語がペラペラになり…。そうではなくて、面白さや個性、まじめに自然界に真正面から向かい合おうとする。その基本はことばです。私の場合は伝統的な儀式をする上での祈りことばを学んでいきたい。暮らしの余裕がなくてなかなかできないのですが。そう考えると坊さんや神父さん、牧師さんはいいなと思いますね。学者もいいかな。学生もいいなと思いますよ。学ぶことが仕事なのですから。

金田一京助がアイヌ語の勉強をするときに、彼自身の認識がクールに持っていたと思えるのは、彼が勉強の中心をユーカラに中心を置き、文学に関心をもっていた、ということです。日常の生活ことばや祈りことば、宗教には興味がなくて、もっぱら文学のみ。つまり、アイヌは滅びるということが前提だったのね。アイヌ語の研究では、一般的には金

田一京助の名前が出ることが多いですが、今ごろは早稲田の田村すず子さんや千葉大の中川裕さんなど、ユニークな学者がいます。それらがつながっていって欲しいと思いますね。

私自身のアイデンティティは何かと言われれば、アイヌ文化と言いますか、アイヌでありたいという願望なわけですが、アイヌ衣装を着れば気持ちが「ふっ」と前に行くんです。外国やデパートに行くとすぐ着るんです。（着物の紋様を見せながら）紋様もとてもきれいでしょう。アイヌ社会では着物を作るということは何も呉服屋に行く必要はなく、自分でつくるというところがすごい。

百貨店の前進はたいてい呉服屋でしょう。私は呉服屋といえば、作り民話ですが、「楢山節考」を思い出すんです。盆と正月に白い飯を食う、食えない場合は人を捨てる。日本人は白い飯を食っていなくて、老人を捨てていたし、絹織物や木綿も着ていなかった。なんとか買えるようになったら呉服屋に行っていた。絹織物はごく一部の人々のための超高級品で、木綿も安くはなかった。それまではたいていは麻でしょう。

しかも、木綿の生産を飛躍的に伸ばしたのはニシンの粕、いわゆる金肥といわれる肥料なんです。蝦夷地交易で近江商人がニシンを手に入れて、ニシンの油を絞って、その粕が米と木綿の生産を伸ばすこととなったという中世・近世の歴史があるわけです。そうして綿布の生産を増やす、しかし庶民は、とりわけ農民はそれさえも買うことができなかった、そういうことを日本人はあまり知らないですね。

今でもアイヌを好奇の眼で見る人は多いですよ。さすがに現在ではアイヌに向かって「日本語が上手ですね」、とは言わないけれど。ひところは、そういうのから始まって、何食べているのか、今日はどこで寝るのか、と聞く人いましたよ。だから「今日は物産展が終わったら筵敷いて寝る」とか「熊の肉の干したのもって来ている」って言ったら喜んでいました。そんなことするはずないのにね。やっぱり今でも内心アイヌを見下している人は多い。アイヌを見れば自分たちより劣っているものとして見る人がね。アイヌ文化をきちんと評価し、対アイヌだけでなくて、日本人の文化を

知った上で日本人とは何かを見ていて、日本文化をきちんと見ていて、その上でアイヌを見る人はほとんどいない。そうして理解しようとする人は少ないでしょう。外国旅行も同じではないでしょうか。日本人が国際人になるということは、自分自身を知っているかどうか。アイヌという立場はアイヌだけに没頭するのではなく、アイヌという立場から日本人を見る。自分自身に対しても、そういうことを含めて、自分は何者かという問いは日本人とは何かという問いにほかならないんです。ゆくゆくは日本人が自分を知って、自分のスタンスを持ってアイヌに接することを望むし、そうなって初めて共生が本当になるでしょう。今は無理ですね、無理矢理「共生」させられているのだから。そういうとカミさんに怒られるかな（笑）。

今はやりの「二一世紀」とは、互いにそういうものを求めるということばが真実味を帯びてくる時代ではないでしょうか。自分たちのルーツ、アイデンティティは何か、自分と自然とのつきあいかたなど、それらをまじめに見つめようとすることが二一世紀です。ですから、私の立場から言えることは言うし、あなたの立場から言えることは言って欲しいし、皆さんの立場から考えることは考えて、言えることを言って欲しいのです。

以上、私を中心としたアイヌの世界について主に話をさせて戴きました。

二、アイヌの文化史

「アイヌの文化史」ということですが、和人との接触が一つのポイントになります。和人との接触は中世から近世にすでに頻繁になっていて、それは近代、現代まで続いてきて、現代では同化政策によってまともな文化・伝統のアイヌではなくなってしまう。アイヌ文化史の中でおそらく最も輝いていた時代は近世あたりではないでしょうか。現在アイヌ文化振興法に基づいて様々な事業が進められていて、今回のアドバイザー派遣事業もその一つなのですが、最近着手

しはじめたものに、イオル構想というものがあります。イオルというのは一般的には狩猟圏と訳しています。つまり、入会権のようなもので、集団で薪をとったりする範囲がありますね。イオルは個人の狩猟・漁労圏で、それを再現しようではないか、という構想がイオル構想です。私もその検討委員の一人なんですが。アイヌ民族というのは一般的に狩猟民族と言われているのですが、むしろ漁労だと私は主張しています。しかも海浜の民と言っています。まちがいなく、アイヌは北海道でも東北でも山奥にコタンをつくらなかったんです。例えば北海道では旭川近文というコタンをご存知の方もいらっしゃると思いますが、近文は和人に追い立てられてあそこまで行ったコタンなんです。近文の人々はもともとは石狩アイヌ、石狩川のアイヌで、海の伝説もあります。もともとは山奥にアイヌがいなかったというのは、東インド会社のオランダの船が黄金を求めて日本に来る一七世紀の中頃、フリースによってオランダ語で書かれた航海日誌に蝦夷地のことが書いてあるんです。これが英訳されていて、それが今では和訳されているのですが、当時日本は近世の時代でしょうか。アイヌ文化の最盛期の末期頃かな。コシャマイン戦争が一四五七年にあって、シャクシャイン戦争が一六六九年、一七八九年のクナシリ・メナシの戦いがあった前後のことですから。フリースが日本に来た頃は、厚岸でもサハリンでもアイヌの住まいは海辺にあって、砂浜で村を形成し、川をさかのぼろうとしても樹木が繁茂していて百メートルも上がることはできない、うっそうとした原生林に覆われた大地である。だから狩猟できないですよね。まあ狩猟は冬にしたのですけれど、マタギもそう。マタギのマタは冬で、ギは動く、つまり「冬に行動する」という意味なんですが。フリースの日誌や古文書などの書籍を見ても、アイヌはまちがいなく海浜の民であって、漁労民族と言えるでしょう。私がそれを最も実感したのはサハリンに行った時です。サハリンには樺太アイヌがいまして、北海道から五〇〇年ほど前にいったのですが、「北からの日本史」ということで言えば、元寇の襲来というのが日本史に出て来ますね。元寇は北からも来たんです。それを樺太アイヌが撃退しているんです。樺太の地名にも北緯五十度以南にたくさんアイヌ語の地名が残っていてね。向うにはウィルタ、ニブフがいるのですが、彼らはアイヌのことを「魚採り

の名人、アイヌほど上手いのはいない」って言うんです。本当にアイヌは魚採りの名人で、漁労民族だった。狩猟もしたんですけどね。でも熊を取るのは肉を食べるのが目的でなくて、カムイ、日本語での熊神をお迎えするためにやったんです。鹿も獲ったけれど、鹿はアイヌ語では「獲物」という意味です。鹿狩りは大勢の村の人たちで追い込みをするけど難しくないんですね。鹿は雪の深みにはまると骨折してすぐ動けなくなるし、三百メートル走ると疲れてしまうような、以外と弱い動物なんです。また狐の場合はコタンの近くに罠をしかけて、引っかかった狐を子どもたちが取りに行くものなんです。狐はアイヌ語でチロンヌップというのですが、「我々　殺す　もの」すなわち「すぐ獲れるもの」という意味です。確かに狩りはしていたけれど、実際に水中にいる魚を獲ることこそアイヌなんです。鮭や鱒は別ですけどね。鮭や鱒は今でもたくさん川に来ますが、私の母は鮭と遊んでいたそうです。鮭とですよ。どうやって遊ぶかというと、鮭が川に上がってきたら、鮭の背に寝そべって少し川を上がる。すると鮭が重みで沈んでいく。沈んだら身を起して、また鮭の背に寝そべって少し川を上がる。そうやって少しずつ川を上っていくんだそうです。鮭や鱒は当時は手づかみできるほどたくさんいましたから、問題ではなかったんです。鮭や鱒を大漁にとる場所は川の上流部のイチャン（産卵場）でとりました。一家して一週間とか一ヶ月とかの間そこにキャンプして産卵後の鮭を拾ったのです。そして拾った鮭を背開きにして串を挿して乾燥させ、それを二十本を一束にして、たくさん集ったら自分の家に持って帰った。産卵後は油が抜けていてよく乾くし、しかも鮭の子孫は絶やさない。アイヌは産卵後のを拾うので、鮭を根絶やしにするということをしない。イザベラ・バードという英国人の本が面白いです。彼女が明治初期の北海道におけるアイヌの状況について書いているのですが、その中に「アイヌはお人よしだ、こんな素敵な人、世の中に他にいるんだろうか。見た目はいかついけど、この人たちくらい優しい人はいない。それに比べると、横浜から連れてきた伊藤という通訳はいかにもいい男だけど、ずるがしこい。アイヌの老婆は憂鬱そうだけど、私に対しては何くれなく食物を運んでくれたりして気遣ってくれる。決してアイヌから話を聞いたと和人に言うなと言って親切にしてくれて…」などというの

があるんですね。それらを読んでも、アイヌってのは海浜の民で漁労民族だと私は思うんです。いずれにせよ、自然界の様々なものと付き合うのがとても上手な人たちだったのです。ところで、私は頭の中は完璧にぐるがしこい日本人なので、私にはくれぐれも気を付けて下さいね（笑）。私は本当にアイヌになりたいと思うのですけれどね。以上話してきたように、アイヌ文化振興関係の事業によってアイヌ文化を取り戻して行く、というとき、その一環であるイオル構想では何を伝統的空間とするかという際には、「海浜の民」ということに重点を起きたいと考えています。そして、天空、宇宙、空間、動物、植物と人間がどうやって対話していくのか、自然界と人間との対話、これ自身がアイヌの宗教、祈りで生活の基本となるわけです。イオル構想をどうやってとりもどすかがとても大切な仕事になると思います。アイヌの若者もやっと帰ってきましたし。

今日はアイヌの文化史ということですが、これは文化そのものの内容になるかも知れませんが、アイヌ紋様について触れておきたいと思います。アイヌ紋様は魔よけと言われていて、私も「何が魔よけなんだろう」、と思っていました。見た目に美しいし、デザインもすごいでしょう（着物の紋様を見せながら）。実は先程から話をしている自然界との対話と関係があって、アイヌのおじいちゃんやおばあちゃんの話によれば、アイヌの着物や彫刻の紋様は自然界から力を借りているそうです。水の渦、川の濁流の渦、渦というのは力をもっている。その渦を取り入れる。吹雪の渦は目も開けられない、進む方向も分からなくなるどころか、磁石も狂うらしいですね。磁石が狂うくらい力を持っている、そういう渦。風の力、風によって紋様が表われるのは空の雲。ゆっくり見てみてください。風によって雲が刻々と変化する紋様はすごいし、神秘そのものでしょう。科学的に言ってしまえば簡単かもしれないけれど。同じ風でも砂の風紋もすごいでしょう。この辺りなら鳥取砂丘がありますね。釧路ならオタノシケ海岸、砂が刻々と流れていく。不規則なようで規則的に紋様が次から次へ、そういう連続性の力。それから植物の中にもそういう力を見出します。蔓性の植物ですね。唐草文様、葡萄唐草の紋様というのは韓国にも中国にも中近東にもあるでしょう。蔓性の植物の不思議な力、

どんな巨木でも登っていく、これを見たらすごいと思うでしょう。蔓性の植物の魅力ですね。それからバラの棘、昆虫の蜘蛛の巣。食器の淵には鬼蜘蛛の背の紋様を取り入れたりします。稲妻紋を取り入れて、悪いものが入ってこないように。他に魚をとる網や策など、連続して設けられたものを取り入れるんです。それも悪魔に対して魔除けの紋様として取り入れます。神はいろんな神がいるのですが、アイヌは神に対して、「カムイは人間があってこそであり、カムイは人間を見守る義務がある」と物申すのです。中にはサボる神や悪さをする神もいてね。そのような神が恐れるのは何かといえば、連続性の力なんです。神の世界は無味乾燥なので、人間の世界こそが躍動的で風も水も人間も動植物も生き生きしている、そういう自分にはない力を魔物は恐れるのです。そういうことがアイヌの紋様の由来だそうで、なるほどなぁ、と思いました。アイヌ紋様には花の紋様はなんです。花は儚いものです。花に霊力や力は感じていません。動物や人間も表現しないんですね。以上に言ったことで、アイヌ紋様は大体理解できます。そして刺繍や彫刻をする人はそれを受け継いで、自分のおばあちゃんや母、父から受け継いで、さらに自分が感じた力を取り入れて行くんです。プログラムに鮭の絵が書いてありますが、鮭もその意味では生命力ですね。群れをなしてやってくる迫力。実際は鮭そのものを表現することはないんです。模写ということですが、これは現代作家が作ったものなのでね。熊彫りは有名ですが輸入品で、スイスから来たものでね、アイヌの伝統ではありません。

私の話は一端ここまでにして、これ以降は参加者の皆さんの質問を受けて、そこから話を進めることに致しましょう。

（質問）元寇の話がありましたが、歴史で習った時は九州への襲来についてでしたが、九州よりも樺太への襲来の方が時期的には早いのですね。そういう戦争の話については、シャクシャインの乱にしても和人側から見たものが多いのではないでしょうか。アイヌ側から見たシャクシャインの戦争について知りたいのですが。

シャクシャイン戦争についてのアイヌ側の記録は勿論ありませんし、伝承もほとんどありません。とくにシャクシャイン戦争のときは、和人側がアイヌの勢力を恐れて一族皆殺し、徹底的な根絶やしをしているし、このことについて語ることも徹底的に封じ込めたんです。シャクシャイン戦争が何だったのかということもわからないけれど、和人側の記録によって想像するしかないのです。コシャマイン戦争は一四五六年ごろと言われ、代表的な戦争だけど、その前後一〇〇年、二〇〇年の間は戦争が頻発しています。奥州の蝦夷征伐が完了して、奥州藤原氏が成立し、和人が政権をとってアイヌは追い出され、彼らは自分がアイヌだと名乗るのをはばかり蝦夷地へ行きました。当時、青森の十三湊に一大勢力があって、交易の拠点となっていました。ここで力をつけた和人の勢力が蛎崎氏、のちの松前藩へとつながって行きます。しかし、彼らにはアイヌの血も入っていただろうと言われています。征夷大将軍という冠を公家が武家に与えていたのですが、征夷大将軍の阿倍比羅夫や坂之上田村麻呂はアイヌではないか、と言われています。阿倍というのもアイヌ語ではないか、という人もいます。アイヌを征するためにアイヌを登用したのかもしれません。いずれにせよ、コシャマイン戦争の頃は東北地方の蝦夷征伐のころの歴史としての残り火がかなりあったわけです。アイヌは東北で手ひどい目にあっていますが、蝦夷地が最後の地と思っていたかどうかは別として、かなり錯綜した状況にあったといえるでしょう。コシャマイン戦争の発端は、和人の鍛冶屋が造ったマキリの切れが悪いといってアイヌの少年がクレームをつけたところ、「こんなに切れるじゃないか」と言って、和人がそのアイヌを刺したことに端を発するということが言われています。これを見ただけでもアイヌが刃物を和人の鍛冶屋に頼らなければならない状況、たかだかそれくらいのことで人を殺すような和人の横暴があったということから、一五世紀の北海道の南の状況は相当悲惨だったと思われます。先程ねぶた祭の話をしましたが、当時は相当悲惨だったと思います。そちこちでアイヌが和人の横暴に対して立ち上がるわけですが、ことごとくつぶされて、その二〇〇年後に一六六九年のシャクシャイン戦争が起る。砂金と鷹の羽を得るために日高地方を中心に和人もたくさん送っていたし、アイヌ側でも利権争いがあったということが窺えるこ

とからすれば、シャクシャイン戦争が一二、三世紀から津軽海峡を挟んだ東北北部と北海道南部の闘いの歴史と見て良いのではないか、シャクシャイン戦争の特徴はアイヌ側が勢力を強めて南下しているということが、民族として今迄なかった、コシャマイン戦争でもなく、せいぜい和人が持っていた砦を襲って滅ぼす程度だったのに、シャクシャイン戦争ではアイヌが国縫まで行って鉄砲隊に阻まれています。これはアイヌのはじめての軍事行動だったのです。その背後にはおそらく、単に和人に圧迫されていたのみならず、アイヌ内部の権力抗争があったと考えられます。それから侍が大きな杯で酒を飲むということ、それはまさにアイヌの血を飲んでいるということにほかならない、風が巻き起こってそこに見えるものはその血であり、それこそが彼らの宴会そのものだったと言われています。女を取り上げ、男を労働力に駆り出した。クナシリ・メナシのときはシャクシャイン戦争の時よりも和人がさらに権力を強めてアイヌを打ちのめして行った時代でその数十年後に日本は明治維新を迎えます。ですからシャクシャイン戦争はアイヌの文化史の中では大きな山場だったのです。もしここで鉄砲隊にあわず、南の国縫までアイヌが下がっていたら、近代史は代わっていたかもしれない。鉄砲でやぶれたけれど、元の襲来に勝つほどの実力があったのです。実際、闘いそのものはアイヌの方が常に有利な状態でした。武器は本来持っていなかったが、熊狩りの槍や弓矢、トリカブトの毒を持っていたんです。アイヌのトリカブトの毒の矢はほおをかすっただけで死ぬし、和人の闘いは骨肉の争いだったかもしれませんが、アイヌは漁労や狩猟であり、ゲリラ戦が得意だった。アイヌの弓は長さ一メートルくらいで小さく、アイヌの弓は目の前までしか引かず、第一関節の長さが矢柄の長さだったし、しかも至近距離まで接近して放つのです。

アイヌが熊祭りで熊送りをする時に、熊に矢を射掛けるのに、接近して十センチくらいのところから矢を放ちます。その熊は飼熊で、二、三年飼い慣らした熊です。勿論熊を育てた家族がその熊に矢は向けず、祭りの関係者がするわけですが。それだけでなく、穴の中にいる冬ごもりした熊にも接近し、あばら骨三枚半を狙うのです。接近してそこに矢を射ると肝臓にあたります。この時はトリカブトの毒はついていません。動物は心臓か肝臓の一部に矢が刺さったらそ

れで終わりなんです。ましてやトリカブトは神経毒なので、かすっただけで終わりなんです。こういうものを使って和人は闘ったのでアイヌは強かったけど、鉄砲にはかなわなかったんですね。飛び道具なので、大きな音がするし、飛んでも玉が見えない訳ですから魔力を感じたのでしょう。シャクシャイン戦争は武器の面からもアイヌの動員力からも危機的な天王山だったと言えるでしょう。クナシリ・メナシはアイヌの長老がなだめ役になって、抵抗しなかったのです。

コシャマインの戦争、シャクシャインの戦争、クナシリ・メナシの戦いの話が出ること自体、こういう話が語られることが三〇年以前にはなかったことです。ある時、友人が「成田、最近いろいろやっているみたいだけれど、栄枯盛衰、弱肉強食、歴史は負けたら終わりだ、どう言おうと歴史は勝者の論理なんだから。勝ったものが歴史を書くんだ。」と言われました。それは裏を返せば「悔しかったら勝ってみろ」と言う意味なんでしょうけれど。日本には「勝てば官軍」ということばがありますが、このような考え方は長いこと日本の意識の中にあり続けてきたと言えると思います。近世まではよくわかりませんが、明治以降の近代は欧米列強と肩を並べて戦わなければならないという方針だったし、明治以降の国家教育は戦後もそれを完全に払拭しているわけではないのではないでしょうか。ましてや学問の世界では、五〇代以上の現役の先生の歴史観は戦前の歴史観が根底にあるのではないでしょうか。最近ではそれはちょっと違うという時代になってきたけれど。中国や韓国から再三再四歴史認識を改めろといわれても我国の政治家は相変わらず反省の色が見られないですね。こういう事からも歴史認識は勝者の論理というのはまだ消えていないと言えるのではないでしょうか。韓国、北朝鮮は独立し、中国は革命によって建国したわけで、最終的に日本政府や国民に対して正面からメッセージを送ることができますが、アイヌは未だに国家や集団としてのメッセージを送ることができません。せいぜい北海道庁のウタリ福祉対策にすがっていて、私がこのような場で語っているくらいです。確固としたスタンス、アイデンティティを近い将来どうするのかという話はありません。最も手近な問題は北方領土の問題です。ウタリ

協会は北方領土問題に関して声明を二回出しています。「北方領土に関する先住権を留保する」「北方領土の返還要求はアイヌの問題を抜きにしてはならない」というものです。北方領土が政府に対してアイヌがモノを言う際のとっつきやすいテーマなんですね。ちょっと消極的だけどロシアと日本政府とのことが進展してほしくないというのが本音です。アイヌがこの問題を正面から論じるにはまだ時期がきていないのです。文化史というか政治史というか、関西の人は北方領土に関心ありますか、北方領土は遠くの問題なのでしょうか。「北方四島は日本固有の領土」とよく言われますが、これほどいい加減な言い方はないのです。北方四島とは歯舞(諸島)、色丹、国後、択捉なのですが、五つ目に得撫島があるのですが、実はそこが私の生まれ故郷なんです。他のカムチャッカまでの千島はどうなるのでしょうか。要するにこれは条約なんです。全千島、全樺太が日本の領土だと言っていた時もあったし、行政府がありました。アイヌを日本人としていて、アイヌが古くから住んでいたからと言って、なぜ四島だけで、全樺太、全千島を日本の領土と言わないのでしょうか。こういうこと言うのは思想右翼だけなのですが。将来、そんなに遠くない将来に、この問題はアイヌ側から行動を起こす必要があります。日本国民は北方領土を自分たち自身の問題として捉えることができていませんね。たかだか一二〇年前に北海道に来てさらに北にある領土を固有の領土という論理矛盾はないでしょう。北海道民もそうです。

北海道の人は出身地の郷土の祭りを大事にします。例えば白糠町は鳥取の古いタイプの笠踊りを保持しています。故郷を懐かしみ、北海道を故郷と思っていなくて、いつしか故郷に錦を飾りたいと思っていたわけですから。開拓生活の現実は自分たちが食べることさえできず、生まれた子どもを殺したり、アイヌに托したりしたんです。北海道の寒い土地で米ができなかったんです。政府は廃藩置県で地位を失なった氏族や農家の次男、三男を北海道に送り込み、北海道を食料生産基地にしようとしました。政府は送り込んだ人々に対して三年間は食物、金や農具を送っていたのですが、三年後はどうしていたのでしょうか。それどころか三年も経たないうちにこんな寒いところでどのように暮していくこ

とができたのでしょうか。北海道へ移住してきた人々はアイヌの家を真似て作ればいいのに板張りの和式の家をつくりました。板張り、重ね張りにすると隙間ができるでしょう。冬に眼が醒めると雪に埋まっている状態で暖房器具は火鉢しかなく、しかも着ているものは麻。寒冷地なので作物なんてできないですよ。北海道開拓は本当に悲惨、大変なものでどれほどの人が死んだか分かりません。さらに囚人労働や植民地からの強制労働を利用して開拓した。その一二〇年間を反省するならいいけれど、開基一〇〇年と祝って美化するなんて…。北海道開拓そのものを反省しないで北方領土の話しをしても仕方がないのですが、政治はそれらを飲み込んでしまって勝手に動いているのです。最終的には歴史というもの、文化というもののサイドから政治にどれだけ切り込むことができるかだと思いますね。私がここに来る直前の百貨店であったあの人はアイヌだろうなという物産展の女性、あの人は自分がアイヌだと一生言わないでしょう。そういう人がほとんどの中でアイヌがアイヌだけで何かやろうとしたり、言ったりしても困難なんです。やはりアイヌだけの話ではなくて皆の問題として捉えてくださいね。

アイヌの話していると嫌になる、最後には情けなくなるんです。最終的には現代の松浦武四郎や安藤昌益がたくさん出てほしいのですが。それが日本の内なる国際化の第一歩で、在日コリアンへの謝罪をすること、被差別部落の人々を差別するような文化性を止めること、それらを止められないでどうするのでしょうか。萱野茂さんによれば、二風谷で二十組の仲人をしたけれど、全部シャモ側から断られ、たった一組うまくいったけれどシャモ側の親戚から結婚式はやらないで欲しいと言われたそうです。アイヌは和人ではないし、在日コリアンもアイヌではないわけでしょう。違って当然なのにね。被差別部落の問題にしても、日本人どうしとして仲間なのに差別していますね。これを反省しないものが、他の問題に口出しできないのではないでしょうか。特にいろんな活動をする日本人に私がいつも問うのは、被差別部落の問題をどう考えるか、ということです。これにきちんと回答できない人が何が市民運動だ、何が労働組合だ、と思いますね。私、カミさんにも迫ったことがあるんですよ。「ところで養代さん、あんた被差別部落出身じゃないの

か？」彼女は「違う！」と抗議しました。「残念ながら違う」と言えばいいのにね。福山（広島県）の天満屋で、最初に私を訪ねてきてアイヌということばを口にしたのは被差別部落の人だったんです。その人はバス会社で働いていて、資格はあるけど運転手にはなれなくて車掌をやっているんだ、と言っていました。また教員免許を持っていて、ピアノの先生をやっているが、教育委員会が採用してくれない、という人もいました。その頃初めて被差別部落のことを知ったんです。そこのデパートで知り合った人と結婚したから被差別部落のことを聞いたのですが、どういうところかよくは知らないというんですね。そんな人がアイヌについてくるなんて、私がよっぽど魅力的だったのかな（笑）。いずれにせよ部落差別をやめないと話が前に進ませんよ。だって不思議でしょう。デパートでどう見てもアイヌの人がいる、こちらもすぐわかるし、向うも避けて通る、つまり顔で分かるんです。被差別部落の人は顔では分からない。アイヌはどこにいても分かるけど、唯一、沖縄では分からなくなるんですけどね。アイヌには分からない人もいるけれど、身体的特徴によって見分けることができるのですが、それがプラスになったりマイナスになったりするのですが。私はアイヌというアイデンティティを持っています。アイヌの地を離れたことないのだから。だけど、本当を言えば、何処かでごまかしてしまいます。酒を飲んでいて、「どこから来たの」と聞かれると「月の裏」とかいってごまかして、一瞬北海道というのをためらっているんですね。そんなとき、「まだひきずっているんだな」と思います。部落差別の場合はそれさえも分からないのに、封建制度を未だにひきずっている。大体、士農工商という身分制度には公家や僧侶が入っていませんね。「えた」や「ひにん」だけでない。身分制度に入らない人々がいるのになんで士農工商かというと、それは武家政治がつくったからでしょう、自分より偉い人々をそこから外した。まさに政治力なわけですよ。釧路市は漁業開拓では佐賀から、農業開拓では鳥取から人々が移民してきました。釧路市に鳥取というところがあって剣道がさかんなのです。「うちは士族の出だ」といって自慢する人もいましたよ。小さいころはすごいな、と思っていたけれど最近は「首狩族か」って言ってやりますね。要するに武士というのは敵の首を狩っているでしょう。自分たちが首狩りを

するのに自らが首狩族と考えず、ニューギニアの人を首狩族と言う。

アイヌの考え方で、やっぱりアイヌが好きだと思うのは祈りことばでも常に「オリパック」と言うところです。それは、謹んで、おそれ謹んで、しゃしゃり出ずにという意味ですが、よくその言葉を使うのです。学者がアイヌ語の話者はいなくなったと言うけれど、アイヌの話者は断えることがありません。その理由は「これがアイヌの最後の話者だ」と言われる人がいると、他の人が名乗らないのです。その人くらいしゃべれる人がいても、自分はしゃべれないと言う。一つでも自分より年長で世に出た人がいたら譲るのです。そしてその人が亡くなって初めて「実はアイヌ語がしゃべれる」と言うのです。このように常に相手に譲ってしゃしゃり出ないで、身を謹むのです。それがアイヌを追い込んだといわれるのですが。イザベラ・バードの記述の中でもアイヌは常に謙って相手を立てるスタンスをとっています。私もそのようになれればアイヌになれるかなと思うけれど無理でしょうか。八重清次郎さんという方が釧路で最後の長老と言われていますが、もし彼が亡くなったらまた別の人が出てくるかもしれませんね。彼は血は和人だけど心はアイヌです。慎ましやかで謙っている。日々の暮らしの姿勢がそうですね。「この人には事故は起きないだろうな」というような静かな人ですよ。アイヌはそういう人だったんです。私もそういう風になれるかな？

（質問）自然と向き合う姿勢について興味があるのですが、「慎ましやか」というのはどこから生まれたのでしょうか。同族の中でも違いがあったのでしょうか。集団の交流の中で生まれたのか、自然との向き合い方、集団との向き合いかたから生まれてきたのでしょうか。

それは私が最も興味を持っているところです。やっぱり自然との向き合いかたからでしょう。アメリカのプエブロインディアン（日本ではそう言うけれど、本当はプエブロインディアンというのはいないのですが）との交流で、彼らが

母なる大地に座ろうよ、母なる大地が東へ動くのを感じとろうよ、と言うのです。砂漠に座って静かな時を過ごし、母なる大地が本当に動いているということを実感する、今は科学的に考えれば分かるけれど、実際に体感するんです。この静寂はすごいです。松浦武四郎の蝦夷人物史に、百人の個性豊なアイヌのことが書いてあります。私は釧路はどうかな、と思って読んでみると、釧路には二人いました。一人は漁師で、漁の名人なんです。小舟一隻を操って、この人が漁に出れば皆が漁に出るし、出なければ誰も出ないのです。実はお天気読みの名人なんですね。ところがこの人は全盲の人なんです。これは間違いなく、肌で気圧を読んでいたと思いますよ。だからプエブロインディアンのところに行くと、一緒になって「うーん、今三ミリ動いた」と言うのではないでしょうか。ミリという単位は別として…。もう一人の人物は激流を行ったり、潜りの達人なんです。この人は両足首がないのです。「どうやって泳ぐのか」と思うでしょう。でも現在でもパラリンピックの水泳競技でメダルたくさん取る方がおられますね。私は人間が自然と向き合って、神経を研ぎ澄ますことができる、実際にそれができるということをインディアンや松浦武四郎の本から学びました。アイヌだけでなくてマタギや先住民族もそうですね。日本人、中国人も古い時代、縄文時代や石器時代は自然と向き合うことが上手だったと思うのです。それをどこで忘れたのか、落っことしたのか、何とすりかえたのかと思うのです。中世以降のヨーロッパや日本、そこをくぐった時期がもっとも悲惨だったのではないでしょうか。それ以前は謙虚になって、風や水を受け容れ、その中で一緒に呼吸をすることを知っていた。アイヌはごく最近までそれをしていたのです。産業革命以降、近代科学文明が人間を幸福にするというような時代を経てきました。これが今では核物質が地球そのものをだめにするとか、オゾン層の破壊とか、温暖化によって地球がだめになるかもしれないとか、科学技術がそれらに気づき始めてきました。ですから、これからの時代は思い切って元に戻る作業をするべきではないでしょうか。宗教界にも責任あると思いますね。宗教は最近全然だめですね。21世紀は先住民族の世紀、環境の世紀であるとともに、共生の世紀と言われています。「お客様は神様」と言われますが、神様はなんでもやって良いというわけではありません。

横暴な神様が多いですね。そういう人を私はやっつけます、やんわりとね。でも絶対やっつけない相手もいます。それは赤ちゃんや子どもです。赤ちゃんは三歳までは神様でね、日本の神様とちょっと違うのですが、アイヌでは、「赤ちゃんは生まれたら喜ぶな、神様から預かっただけなんだから。しばらくの間慎重に大切に育てなさい、大騒ぎしてはいけない」と警めるんです。それは当然だと思います。赤ちゃんは病気などに対する抵抗力も弱い、生存率も高くないわけですから。私は「なんで赤ちゃんはカムイなの」ってエカシに聞いてみたんです。そしたら、「赤ちゃんは腹減ったら泣くべ。眠くなったら泣くべ。泣けば親が一生懸命になって何でもするから、カムイ以外の何者でもない。」と答えてくれました。要するにこれは三歳ぐらいまでの赤ちゃんに対して人間がどう接するかを教えているわけですね。今時の親は乳幼児を殺すんでしょう。これは考えられないですよ。アイヌ社会のような考え方を持っていたら三歳ぐらいまでは徹底的にかわいがって大切にします。現在は哲学も思想も宗教もないですね。赤ちゃんを道端に捨てるなんてとんでもないですよ。アイヌ社会では赤ちゃんはカムイからの授かりものなので、誰が生んでも関係ないんです。そうやって大事に育てて、やっと言葉を覚えて、泣くことで意思表示をしなくなる頃に名前をつけ、そのときから厳しいしつけをするんです。これは理にかなっているでしょう。赤ちゃんに心のそこから「カムイだ、よくきたね」というと必ず反応しますよ。ことばではなくて、私からの発信を受け止めているんですね。誰がやっても一緒です。接し方でわかるんですね。慎ましやかに自然と接するというのは、接し方のいくつかの方法をアイヌ民族として知っている、それを伝承してきたということです。イザベラ・バードの日誌にも出て来るのですが、コタンをよその村の人が通るときは通り方というのがあって、会釈した後に村はずれを静かに通り過ぎるのです。人の家に行くときはいきなり行って入るのではなくて、咳払いをしながら自分の存在を知らせながら行き、入り口でもそうして来訪を知らせる。これは屈斜路で聞いた話なんですが、家を留守にするときは、錠前かけて戸締りして出かけるのではなくて、誰かが来ても困らないように食べ物や飲み物を炉淵に上げていきなさいというそうです。「人を見たら泥棒と思え」というのとは全く違うわけで

す。このような慣行は日本にもあると思うのですが、すごいことでしょう。アイヌの挨拶言葉は出会うと「マンマくったか」と言うんです。「ご飯食べていきない」という意味なんですね。「さっき食べた」といっても「食べていきなさい」と言うんです。イランカラプテという挨拶は遠来からのお客さんに対してするんです。また家族どうしの挨拶は瞳でするんです。瞳をきちんと見るというのは、多分アイヌが動物や植物を観察する、目や耳や肌で観察するというときに、目というのがとても大切な観察の道具なわけで、それを大切に上手に使うんですね。慎ましやかというのはそれらの総合力です。そうすれば必然的に子どもへの接し方、大人どうしの付き合い方、風との対話、気候を読む、自然を読む、今自分が何をするときかを自然から読み取ることができるわけです。必然的に謙虚になりますよ。台風に向かっても、濁流に向かっても対抗できないでしょう。自然を読んで静かにして、どうしようもなければ祈るんです。「カミよ、おまえは我々を見守らねばならないのに、どうして嵐は止まないのか、早く我々の役に立て。それでこそカムイだ」ってね。祈るときも礼儀をつくして相手を重んじて、相手に自分のことを伝えるんです。カムイノミというアイヌの儀礼は非常に丁重に、イナウやオミキをささげ、何よりも丁重に祈りことばをささげるのです。できることをへりくだってできるとし、できないことをできないとしてお願いし、それを重ねていくのです。ですから儀式に参加している間中気が休まるんですね。時間がゆったりと流れる、だからカムイノミがとても楽しみで待ち遠しい。なぜそういう時間や空間を日ごろもてないのでしょうか。こんな暮らしはしたくないですね。だからやっぱり、アイヌ文化の真髄は自然と向き合うというところにあると思います。

地域差はあるのかという御質問ですが、松浦武四郎の蝦夷日誌から見てみます。例えば、不倫を犯した男女がどういう行動をとるのかというと、逃げるんです。ひたすら隣村へね。そのような男女に逃げ込まれた村は「そうか、まったく悪いやつ」と言ってかくまってじっと時間を待つのです。そして二人の様子を見て、どこから来たのかをゆくゆく聞いていき、落着いた頃に使いを出すのです。逃げられた村の方では、いずれどこからか使いが来るとわかっているの

で、誰も探しにいかないんですね。そして村の人が状況判断をして落ち着いたら当事者同士を話し合わせるんです。もしくは村の代表が代理で話しあいます。ですから、村同士ではちょっとした地域差はあってもそれほど違わないのです。

先程イオルの話をしましたが、ある人が釧路川の川筋から茶路川の川筋、雌阿寒岳のふもとまでの三角の地域が私のイオルだと主張するとします。もし、隣のイオルで矢を射掛けた鹿がこっちのイオルで倒れたらどうするかと言えばその獲物を半分こするのです。だから相手のイオルにも自由に入るんですね。約束事あるから半分もって来るのは当たり前なんです。中にはその約束事を守らない人もいたのですが、そのように約束事を守れない場合は裁判を行います。裁判にはいろいろなやり方がありますが、どれを見ても自然界の中の摂理からその方法を取り入れています。しかし最も重んじるのは言葉ですね。チャランケと言って、物事を解決する最大の方法は言葉、話合いなんです。いかに自分が正しいかを主張するのですが、代理人を立てることもできます。話をすること自体がとても大事なのですが、しゃべりすぎはだめだそうです。萱野さんは、「アイヌは二枚の耳と一枚の舌があるのだから、二つの耳で聞いたら一枚の舌でしゃべればいい」、と言います。なるほどなぁ、と思いますね。また、山本多助さんが、「人間が戦うときの強い武器は言葉だ、だから一番やってはいけないことは、人をののしったり悪口を言ったりすること。言葉は最も人を傷つける、だから言葉を慎みなさい」と言っていました。私は講演でもよくこの話をするんです。言葉は人を殺すこともできるたった一言、例えば「死んでしまえ」などと本当に心を開いている人からの言葉で自殺してしまう人もいるでしょう。だから言葉というものは疎かにしてはいけないし、謹んで使うべきなんですね。本当に言葉というのはすぐれた道具です。これらはアイヌ社会では共通しています。沖縄もそうみたいですね。琉球が薩摩と闘うときに、闘いの先に立つのは女性だったそうです。薩摩の兵士に向かって女性が罵声を浴びせた。そうした沖縄の文化はそこにこそ大切な部分を持っていたと思います。確かに近代戦に敗れたり、何度も琉球処分を受けたかもしれませんが。だから沖縄の文化の真髄を

発揮するとき、沖縄の音楽が生き生きしているのがその兆しならいいなと思います。日本の若者が沖縄の文化が受け入れられるのは、ある意味では日本の文化の冷たさの裏打ちではないでしょうか。やはり人々は心があるものには惹かれるんですよ。日本の中で心底声をあげて謡い、心を揺らすものがあるとすれば、それは被差別部落のものではないでしょうか。数多くの子守唄など、盆踊りもそうですね。アイヌの社会であろうと、沖縄であろうと、被差別部落であろうと、本当に人間が人間として触れ合っていく時に何が必要かということを地で知っている、それが文化の底力です。私自身体験したことは少なく、長老から聴いたこと、古文書を読んで、少し体験したことから推察しているにすぎないのですがね。

三、アイヌの歌と踊り――「豊かさ」とは何か

アイヌの歌や踊りということについてお話をする、ということですが、まず歌について。ウポポというのがあります。これは歌とされていますが、直訳では「後ろをとる」という意味で、つまり追っかけ歌なんですね。追っかけ、すなわち輪唱、あるいは重唱がウポポの基本です。また踊りはリムセとされますが、実際は足踏みです。ですから、踊りはいわば踏舞、つまりステップを中心とする踊りで、あくまでもリズムを採って足踏みを基本とした踊りです。そして、楽器にはトンコリというものがあります。トンコリには、五弦、六弦、三弦がありますが、五弦が最も多いです。それから一弦の胡弓、馬のしっぽの毛で弾くものがありますが、これはモンゴルの馬頭琴がルーツではないかと言われています。それからムックリ（演奏）、こんな音です。楽器としては口琴と訳されています。面白いことに実はこれは日本中にあったんです。アイヌ語はムックリなのですが、これと全く同じ楽器を台湾のパイワン族が使っていて、大きさは少し大きいのですが、構造や演奏の仕方は同じです。この口琴は、埼玉の大宮の千年くらい前の遺蹟から出土して

います。また鹿児島と江戸で江戸末期に流行したのですが、流行するとお上は禁止したがるんですね。ということなどから、この楽器は日本中にあったということが言えると思います。今ここにタイのアカ族の口琴を持ってきているのですが（演奏）、これは指ではじいて鳴らすもので、原理は同じです。他に金属のものもあります。カニムックリと言ってヨーロッパから来たものを樺太アイヌが使っていました。この楽器は今やアイヌの伝統楽器とされています。他にカチョ、太鼓のことです。また、チョンカックルいわゆる草笛で、草を鳴らすのではなくて、太い筒になる植物を鳴らします。アボリジニのディジュリドゥと同じです。それから樹皮笛、桂の皮を巻いて鳴らすもの、鹿笛、鹿をおびき寄せるためのもの、実際は狩猟具です。このように歌と踊りと楽器があるのですが、楽器を演奏して歌を唄うのはありません。楽器はあくまでも楽器だけです。トンコリは樺太アイヌが中心で、百年くらい前にはたくさん曲があったそうです。今三曲マスターしたのですが、十曲くらいマスターしたらグループを組んでいろいろなところへ周りたいと考えています。そのうちチャンスがあれば是非聞いてみてください。トンコリは大変面白い楽器で、その先生は実は今浦和市にいます。樺太アイヌから直接習ったかたがいます。彼女は三味線の先生なんですがね。歌にはイフンケ、子守唄があります。アイヌでは子守唄は独立してあるんです。また恋歌もあって、これは独特のものです。和人の侵略を受け男性が労働力として連れて行かれて、その状況の中で女性たちがあの人のもとへ行きたい、翼があったら飛んでいきたいと歌う悲しい歌です。これはアドリブでやるんですがね。また語りにもたくさん種類があります。それと、これはモンゴルと共通していると言われるのですが、二人の人がお互いに動く口を接近させて、相手の口腔を利用して歌を歌うのがあります。お互いに音を共鳴させる音を出すんですね。レクッカラといい、これはとてもすばらしい。残念ながら今はこれができる人はいないのですが。

実際に伝承しているものは、儀式や祭事に唄われ、踊られます。輪舞に「ウタレ　オ　プン　パーレヤン　リムセレヤン…」というのがあるのですが、これは、「さあみんな立ち上がって踊ろうよ」という意味です。他に「カミ様がお

尻を持ち上げたよ」という歌、つまり神様が立ち上がったという意味なのですが、これは神迎えの歌なんですが、いくつもあります。他に魔除けの踊りもあります。これは災いが起ったときに、神がちゃんと見守っていないから災いが起こったんだ、という威嚇の歌で、剣の舞、弓の舞などです。さらに儀式や祭事の時に圧倒的に多いのは、動物の所作を取り入れた踊りです。鶴、狐、燕、雀、鯨など、たくさんあります。ほかに仕事歌、杵搗歌があります。日本の民謡にもありますね。アイヌはアワやヒエを栽培していました。米は和人が持ち込んだのですが、アイヌヒエという種類のヒエがあります。これは北海道にしかありません。なぜかは分からないけれど、北欧にも同じものがあります。またアイヌは農耕踊りをしていました。種まき歌があるんです。「チョチョイチョイナ　イホレイヤイホホ　イホレヤオ…」と歌いながら、足で土かきをする所作をするのです。これは北海道中にあります。仕事歌の中に農作業のものがたくさんあります。それから舟漕ぎ歌があります。これは「樺太の海の波　高い高い　帆を上げて　村の沖合いを通りすぎよう」という歌で「セイーヤッス　セイーヤッス」と掛け声をかけながら舟を漕ぐのです。今回、春から造った舟を支笏湖に浮かべて進水式を行った時にその歌を唄ったんです。やっぱり勢いがつくんですね。来年カナダでやりたいと思うのですが。この歌が唄える人はあまりいないけれど、阿寒の人々が上手ですね。どうもこの舟漕ぎ歌はロシアっぽい。音楽の専門家が聞いたらアイヌの音階ではない、と言うと思います。音階についてですが、皆さんはドレミファソラシドというのを想像されると思いますが、アイヌはトンコリの五絃で演奏するのです。デパートなどで演奏するでしょう、そうしたらいろいろな質問をする人がいてね、「アイヌにも楽器があるんですか」とか「音階はあるんですか」という人もいる。音階は西洋音楽のものだけでなくて、いろいろあるわけです。いずれにしても船漕ぎ歌はロシア風かなと思うけど、とてもすてきな歌です。それから子どもたちの遊び歌や踊りがたくさんあります。日本では「ギッコンバッタン」というのがあるでしょう、座って手をつないで足を伸ばしたり曲げたりする、あれはアイヌの子どもたちもやるんです。それから弓の遊び、槍投げ、綾取り、棒取り、これらは当然唄いながら遊ぶんです。大人には「エプリサラ

リサラリ…」と言って、お盆を差し出す方と受け取る方に分かれて遊ぶものもあります。棒を使ってやることもあります。アイヌの歌はほとんど女性が歌います。そのほかに、色男の踊りというのもあります。これは一人の男を二人の女が奪い合うというものですが、皆は喜ぶけれど、私はあまり好きではありません。これは伝統的なものではないと思います。それから、風、波、大木など自然界の風景を踊りへ取り入れます。先程言いましたが、動物の踊りもそうです。動物はカムイなのでいろいろ出てくるんです。このような歌や踊りが本当に上手なのはおばあちゃんになってからなんですね。年行けば行くほどいい声になる。アイヌの歌や踊りは死ぬまでやります。音階に定められ、音符に添って踊るということはなくて、一人一人個性的なんです。同じ曲なのに、その人の個性でやるんです。違うのだけど皆で合わせてやるんです。それぞれが非常に個性的な歌や踊りをします。そして歌だけが独立してあります。合唱するものにイカムカサンケというのがあります。「イーサンケー　イーサンナー」つまり、蓋をそこに差し出しなさいと言って、アイヌ語ではシントコという円筒形の漆塗りの入れ物の、蓋をとって下が空洞になっているのでそれを太鼓にするのです。アイヌはシントコをとても大切にするのですが、この蓋を取り出してさあみんなで歌いましょうよ、という歌です。他に、「チュッカワ　カムイ　ラン…」という神迎えの歌があります。静内地方の歌い方で、神様が大きな岩に降りてきて、腰につけた金銀の飾りがシャラシャラなっていますよという歌です。昭和三〇年代に、ＮＨＫがアイヌの歌を精力的に収録し、それがテープや映像として残っていて、専門家がそれをアイヌの音楽として楽譜をつくり、譜面になっているんです。それを頼りにしてアイヌの歌や踊りを復活していくことが可能となるし、眼一杯復元していけばいいなと思っています。そもそもアイヌの歌や踊りはステージにたって演ずるものでなくて、自分たちが楽しみ、神にお見せするというものなんです。ですからステージに上がったら挙がったということはないんですね。もしそうであれば、観光のためでしかない、ということです。基本的にはそうならない。

いつも思うんですが、おそらく日本人の社会では庶民にはこれだけ豊富な歌や踊りはなかったのではないでしょう

か。昔はあったのでしょうか。被差別部落には子守歌や盆歌、踊りなど、素晴らしいものがたくさん残っています。それは、あまりにも過酷な収奪を受けたために盆と正月にこそ熱狂的に歌う、踊るという歴史的な背景があるのですが。アイヌの子守歌や恋歌は語り歌に負けないくらい熱いものがあります。日本舞踊や歌舞伎、能は形式化され、舞台に持ち上げられ、金持ちが楽しみのために民衆のものを専門化させて職業にしましたね。それは貴族の囲い芸にすぎなくなってしまった。家柄というものもあるらしいですね。これを外国にいってこれこそが日本文化とする。確かに日本文化です。歌舞伎はもともとは猿楽や田楽などの畑仕事から出来たものですよね。しかし、それを貴族が囲いこんでしまった。それは日本の庶民文化ではないと思います。能や歌舞伎の役者はそういうことを知っていると思いますけどね。日本の伝統文化というものは、実際に日本文化を支える多くの大衆が持っているものこそが文化の根源だと思います。アイヌの場合は日本のものと比較してみても、まさに民衆の文化でしょう。アイヌでいう人々の魂、だから歌や踊りというものが自分たちの中から発して、自然界の風や波や仕事の歌もあり、神々に迎え、自分たちの存在を神々とともに喜び合う。

今まで幾つか見てきたように、アイヌは暮らしの中のあらゆる場面から歌や踊りをどんどん作り出していきます。今回紹介したものも、ほんの一部に過ぎません。アイヌの文化を伝承していきますが、歌や踊りは儀式や祭事に欠かせないもので、実際に自分の身体で覚えて伝承していくのです。そして、イノンノイタクという祈り言葉がアイヌ語の基本です。ヤヤンイタクというのが口語体で、アトムテイタクは雅言葉であって、日常語と雅言葉は違うのです。

輪踊りというのは時計周りに大勢の人が周るのですが、世界中に共通していますね。それで始まってそれで終わると言ってもいい。時計周りといいましたが、逆周りもありますけれどね。競い合う踊りもあります。歌のテンポがどんどん速くなる、心臓破りの踊りです。輪舞でさえ競い合うのです。アイヌの踊りは足腰にくるので、とても大変です。そうしてどんどん早くして、最後まで残るのは誰だ、と言って皆でわいわい楽しむんです。普段足腰きたえてないとだめ

ですね。バッタの踊りは単調な踊りで難しくないんだけど、一分もたたないうちに足きますね。世界中を周ってみたけれど、アイヌの歌や踊りは非常にしんどいね。そして、アイヌの歌や踊りは本当に種類が多いね。

歌や踊りが豊富であるということ、これはやっぱり余裕でしょうね。もしも食料が不足しているようだったら歌や踊りは生まれないでしょう。余暇が歌や踊り文学を生むんです。刺繍仕事もそうです。刺繍と言えば、アイヌでは「冬は女の季節」「夏は男の季節」と言うんです。秋と春はないんですね。アイヌは二期。冬はマタ、夏はシャク、春はパイカルと言って、夏のはじまりの季節という意味、秋はチュクと言って、冬のはじまりの季節という意味、春と秋は非常に短いんです。どういうことかと言いますと、冬は女性は働かなくていいということ。彼女たちは囲炉裏で刺繍をするのです。その間に男性はマタギすなわち、狩りをするんですね。カムイをお迎えするために雪深い山奥へ一ヶ月も二ヶ月も出ているんです。食料は熊肉の乾したものを持って行きます。乾すと日持ちするんですね、しかも腹持ちするんです。鹿肉は消化が良すぎてすぐ腹が減る。熊肉と塩、山刀、マキリ（小刀）、弓と槍を持って出かける。アイヌは冬山では遭難しません。アイヌは自然界との付き合いが得意で、雪の洞穴や仮小屋をつくって過ごすのが得意です。そうして熊を獲って背負って、小熊をかかえて帰って来るんです。では夏はどうかというと、夏は男性は暑い日ざしをさけて家の中でゴロゴロ寝ているんです。女性は畑仕事、海漁、狐狩りなどをすると言われていました。こんな時代、日本で言う中世一二から一七世紀が北海道のアイヌの輝かしい時代でした。東北地方のアイヌは苦労していましたが。樺太アイヌは強くて、元寇がきてもやっつけるくらいですから。それがユーカラの中の英雄物語なんですね。若くて強い英雄が語られるユーカラがありますが、これはおそらく元寇の物語で、和人との戦いではないでしょう。こういう文学を生み、歌や踊りをたくさんもっていたアイヌ社会はかなりの余裕があったと思われます。ですから生産に余裕があったのでしょう。先程も言いましたが、余裕がなければこれほどのものを生むことはできません。三内円山遺跡で出土したものの中にタイやヒラメの大きな遺骨があったと言いました。縄文時代を含めてそのように相当の余裕があり、だから争

いが極めて少ない社会だったと言えるのではないでしょうか。そういう意味で神々や自然界のものと非常に上手に共生していたのです。「共生」、この言葉はアイヌ文化のためにあると言ってもいい。自然界のものと呼吸をあわせる、このようなものから彷彿と湧き上がってくるでしょう。共に生きる、「共生」は伝統的に持っていた考え方です。その考え方の最も代表的なものは、生産の方法に見られると言われます。アイヌ文化は漁労だ、と言いましたが、狩猟も勿論したし、農作業もした。山菜野草の類もたくさん採ったけれど、アイヌは根こそぎ採らないで必要なだけ採るという考え方を持っています。萱野茂さんがよく言うのですが、アイヌにとって山や海は冷蔵庫だ、だから全部とりだすことはない。必要なものだけ必要な量しか採らない。この生産の余裕というものは商業生産を持ち込んだ和人によって壊されてしまいました。それ以前こそが本当の余裕であると思います。例えば、弥生文化は米の生産によって余剰生産ができ、貯えることによって飢えることがなく、社会が発展したと言われますが、この見方はいずれ覆されるのではないでしょうか。確かに余裕ですが、それは人をやっつける余裕なんですね。自分が生産したものを奪われるのが嫌で、周りにわざわざ敵を見つけて、仕掛けて、相手を攻め立てて、自分を守ろうとする余裕ではないでしょうか。ところが縄文の本能は生産そのものが余裕なんです。だからとり過ぎないんです。現在、世界的な問題は人口爆発でしょう。この人口爆発は明らかに生産のバランスを失っている、特に性生活のバランスを失っているんですね。とりわけアジア、アフリカ諸国は、食料をバランスよくとることができないで、人間の生活そのものが壊れている。いずれにしても、貧乏になればなるほど子沢山になる。食文化を支える余裕がないと人口爆発につながっていく。言うまでもなく、この問題は欧米などの工業先進国の犠牲のうえに置かれているのでしょうが。時代差の比較になりますが、アイヌ社会は実にバランスがとれていたと言えるでしょう。アイヌ社会は生産に余裕があって、人間の集団として共生が上手くいって、バランスがとれていた、そういう民俗学があったら面白いでしょうね。最近は文化人類学など、いろんな細分化が進んでいて、これからどんなのが出てくるか分からないけれど、楽しみですね。

産業革命によって、近代ヨーロッパ社会は分業化することによって生産性を高めたと言われますが、この見解も将来見直されるのではないでしょうか。やっぱり結局は余分に富を持つこと、産業革命は植民地政策と直結し、アジア、アフリカの資源を略奪し、再生産して工業製品にし、それによって富を得て、戦争を行った。社会のバランスが崩れたらすぐ戦争をするでしょう。結局はドイツ社会がバランスを失うなかで戦争を行ったでしょう。これは富の分配の問題なんですよね。これからは、社会学、歴史学など、もう一度先住民族の社会構成を見直すべきではないでしょうか。

二一世紀が環境の、先住民族の世紀になって欲しいと本気で考えるのであれば、日本はアイヌの、アメリカはインディアンの、オーストラリアはアボリジニの文化をかえり見るべきですよ。そういうところから本当の共生の真髄、本当の余裕を考える必要がありますね。そして例えば車社会を生んだ科学技術はもうすこしゆっくり過ごすために、本当の余裕とは何かを、先住民族が保持してきた知恵を借りて、本気で考えるべきではないでしょうか。先進諸国はずいぶん前に、それを置き忘れた、あるいは放棄したわけですから、それをタイムマシンに乗って見に行くわけにはいかないので、つい最近まで保持してきた先住民族の知恵を借りるべきではないでしょうか。

アイヌの祈りことばの世界や文学のユーカラの世界、その広がり、その深さ、味わいはすごいですよ。私は、それはアイヌの哲学、アイヌの思想と言えると思います。アイヌのユーカラは世界の三大叙事詩と言われます。確かに抒情詩や別の形のものはあっても、叙事詩という形態のものは日本にはありません。東洋ではインドのラーマヤナとアイヌのユーカラがありますね。ラーマヤナはインドネシア、フィリピン、タイへの影響、南アジアの文学を占めています。ヨーロッパではイリアス、オデッセイ、フィンランドのカレワは北欧の文化を担っていきましたね。

（質問）先住民族の文化が優れている、というのはよくわかるんです。先住民族の話は、現代社会に対して批判的な側面がありますね。しかしながら今の社会を見てみると、少なくとも先住民族の生活水準は必ずしも高いものでま

ない現状の中で、やはり民族の独自性を主張するのも大事ですが、共生という思想から考えてみても、批判している現代社会の技術は上手に取り入れていく方向は考えられないのでしょうか。

たぶん、ごく普通に考えればその方向でしょうね。しかしながら、例えば「生活水準」、これは何でしょうか。「生活のレベルが高い、低い」とは一体何でしょうか。

（質問者）例えば、衣服、医療技術というものが挙げられます。現代社会はある意味物質的な選択の幅が広いのではないでしょうか。そういうのは一つの豊かさ、文明は高いレベルにあると言える、それは良いのではないでしょうか。そういう水準にあるから他の文化にも目が向けられるのではないでしょうか。先住民族の側でも物質面で積極的に同化する、一緒にやっていくという方向がいいのではないでしょうか。勿論、同化と言う時にどっちが主導権が握るのか、という問題もありますが、その辺で折り合いをつけていく、ということが重要なのではないでしょうか。

その折り合いは、インディアン、アイヌ、アボリジニ、先住民族側がつねに折り合いをつけてきたんです。それを拒否してきたのがモノ社会です。「豊かさ」とか「文明」などはいかにも説得力があるように見えるけれど、現在、物質文明は説得力を失いつつありますね。例えばアメリカ社会を見てみると、都会はスラムを生み、病はすでに心の病に至っている。これは本来治せるものではないのですね。物理的な病に対してはかなりの医療技術があると言われていますが、しょせん百歳程度の人類の寿命を以って、医学が発達したといったってどれほどのものでしょうか。例えば人間が五〇年を寿命とする生物だとしても、十分に豊かに生きることもできたわけです。現代は年老いて豊に生きることがで

きるのでしょうか。うっかり金ためて、だまされたりする高齢者もたくさんいるでしょう。つまり、本当に豊かというのは何か、「文明」とは本当は何なのか、産業革命以降の社会が「豊かさ」、「文明」というものを目指してきたけれど、その結果マイノリティや先住民族を虐げてきた。その典型例が植民地主義によって得たモノ社会でしょう。だから同化、同一化、画一化、標準化というのはこれからは極めて「非文明」的なもの、論外と言えるのではないでしょうか。むしろ個性や異なることの存在の方がはるかに、これらにまさる人間のありようではないでしょうか。個性や異なることの存在を尊重する、それこそが共生なんです。それができない社会に共生は無理ですね。男性と女性は違うでしょう、それぞれはそれぞれとして尊重すること。アイヌとインディアンは違う。単純なことですよ。気候や住んでいることろ、取り入れる自然界のものが違い、そこに存在してそこに在るものとともに生きているのですから。また、衣服が豊かというのはどういうことでしょうか。日本の文化を外国の人々にお披露目するとき、十二単や歌舞伎衣装を日本の文化だと言うでしょう。自分自身着たことないし、体験していないでしょう。アイヌはアイヌの衣装を自ら作りその衣服を着ていたのです。日本人の文化は衣服で大衆化できたのは和服では浴衣ではないですか、それもまともに着れるようになって間もないでしょう。今は外出着になっていますが、そもそも寝間着、下着だったものでしょう。

それから病、医学の発達ですが、私に言わせれば、「発達のしすぎ」、いずれ崩壊するのではないでしょうか。病理的な物理的な医学はもう底が見えているのではないですか。これからは精神社会に医学が立ち入ることができるかどうかだと思いますね。

今ここに蟻が這っています。アイヌはたまたまその辺を這っている蟻を殺しません。アイヌは蚊が腕に止まっても殺さないんですよ。「たのむから、あっち行ってくれ」というんです。小さな生き物でもむやみに殺さない、蚊は人間の血を吸うんだから叩いて当たり前というのはモノ社会の考え方ではないですか。本当に命を大切にするならば、蚊や蝿であってもむやみに殺すはずがありません。アイヌではこう言っていたんだそうです。「この世の中に生きとし生ける

もの、命あるもので、世の中に存在するということに何の意味もない生き物はいない。どんな生き物であっても、何らかの役割を持っていてこの世に存在する」と。それを不要なものとするのは論外です。この話をするとカナダのインディアンに笑われてしまいましたけれど。カナダのインディアンの住んでいるところには、たくさん蚊がいるからまた違う。アイヌは蚊が多いわけではないのでね。

いずれにせよ、今後テクノロジーの社会は相当、様々な反省を迫られるでしょう。だから「豊かさ」や「文明」が本来の、これまで語られたものとは違う方向へ行くべきだと思います。私は、「日本人、本当にこれでいいのか」という気がして止まないんですよ。このまま行けば、日本社会はいびつになって、心地よく生き延びれないのではないかと思うのです。そういう私も頭の中は日本人なのですけれど、アイヌだという烙印を押されてきて、その烙印を見つめなおしていて、本当にアイヌになれるかどうかは私自身にかかっているのですが。日本政府にはわびてもらわなければならないしね。でもこれは日本人的な考え方なんですけれどね。こういうことをアイヌは言わないんです。本当にお人好しなんですよね。いずれにせよ、これからの時代車社会はくずれるのではないかと思います。

（質問）私も秋辺さんが仰る方向へ行くのがいいと思うのですが、技術的側面と精神的側面を分けて考えるべきではないでしょうか。やはり技術的な側面は進歩、あるいは現状を維持するのが望ましいのではないでしょうか。カナダへ行くのは飛行機があるから行けるわけだし、盲腸になったら医療があるから治る、それは今後も技術革新は進めるべきではないですか。

私はそう思っていないんです。もう飛行機にのってカナダに行かなくてもいいと思っています。確かに国連で会議があるときは飛行機で行くけれど、飛行機に乗らなくてもいいような地域社会が熟成されればいい。そうすればわざわざ

国連で会議する必要もなくなる。必要最小限でいいですよ。超高速で移動できる交通手段が必要でない社会になればいいと思っているんです。今はメチャクチャでしょう。ダンピングで大変な競争社会です。また、病に関してですが、食生活や暮らしそのものが変質している、それに医療が後追いしているだけに過ぎません。例えばインドネシアのスマトラ島やカリマンタン島の子どもは道端の水溜りの泥水を飲むけど腹をこわさない。私たちは三分もたたないうちに腹を下すでしょう。大腸菌の持っている数が違うんです。ましてや盲腸炎にかかること、これ自体が文明病、明らかに現代医療を必要とする体になっているんです。山菜や野草の助けで済むような人間の暮らしができるのが最も望ましいのではないでしょうか。ここまで世界の地球上の空間が狭まって、通行手段の時間がそうとう短縮されて、いろんなことがわかった、「もういいじゃないか」ということを考えていくのが二一世紀ではないでしょうか。宇宙科学もそう肥大化しないのではないでしょうか。実際に宇宙に行くということは一つのテストに過ぎないのではないですか、軍事的な意味があったのでもてはやされましたけれど。人類はたかだか二〇〇万年生きてきたけれど、地球が滅びるまであと四五億年、それまで人類という生物が生き延びることができるのでしょうか。私は生き延びれないのではないかと思うのですね。とりわけここ二〇〇年が超加速化されています。人口爆発をはじめとし、今や様々な弊害を地球に与えているわけでしょう。本気で車を捨て、飛行機を捨てることを覚悟しなければ、人類は生き延びれないのではないでしょうか。そうはいっても私も明日死ぬかもしれないけれど。二一世紀は先住民族の知恵を借りないと、人類は滅びへの加速は止まらないのではないでしょうか。でも、そこまで人類は浅知恵なのでしょうか。

（質問）今のお話では、逆行したほうがいいという風に聞こえるのですが、もしそうなら、我々は良いとして、我々が経験したことを後の世代に経験させなくていいのでしょうか。

それは誰に向かって言うのかが問題だと思います。アジア、アフリカ、中国の人々の中で外国に行ける人は何人いるのでしょうか。そんなのは先進国のわがままではないですか、彼らにどれほど情報が伝わっていると言えるのでしょうか。アジアやアフリカの人々は人口爆発で行き先が見えていない状況にあるでしょう。我々が得た知恵を本当の意味で共有する、どれほどの人たちと共有できるのか、その意味での衣服や医療の文化ならいいと思いますが、実際、そんなことはありませんね。アジアやアフリカの人々は先住民族の文化を受け継いでいましたが、徹底的に搾取されました。アフリカの社会は悲惨です。彼らが自分たちの文化のアイデンティティを持っているかといえば、ほとんど壊されてしまった、そういう人たちが人類の大半を占めている。それらを考えないで「文明」なんて…。よく国益ということが言われますね。日本、アメリカ、ヨーロッパの社会はこの豊かさを手放したくない。だから戦力も持ちたいのではないですか。政治家は「我々はがんばってこの国を守っている」と言うでしょう。アジアにはお目こぼしをするけれど、ほんの少しの分け前でしょう、ＯＤＡは本気ではないと思いますよ。今、アイヌとかアボリジニ、インディアンなど、先住民族同士の考えの中で、ここ十数年の間にネットワークできています。まだ始まったばかりであと十年、二十年、先住民族の権利宣言が出て、条約が結ばれる頃には、もっとレベルの高いネットワークができているでしょう。そうしたときに国益とか国境というものを越えて地球規模で先住民族が知恵を出し合っていく時代が来ると思うのです。その時に真価が問われるのではないでしょうか。その時こそ「先進国」「文明国」の側が共生しようと言って、どういう態度を取れるかが問題ではないでしょうか。

（所感）今お話を聞いて思ったのは、やはり、社会福祉も病気をつくるような社会の中で後追いしている。後追いするだけでなく、逆に同化、画一化という波に乗って、それを助長するような機能を果たしていると言えると思います。その辺りはきちんと見なければならない。秋辺さんがおっしゃったような、本当の意味での余裕、精神的な

余裕、深み、幅というところから、社会福祉は何かを考えなければならないと思います。

そうですね。社会福祉は言ってみれば「お目こぼしの世界」でしかないものからスタイルをつくってきている。スタートが欧米社会のとくに、キリスト教も含めて、富めるものが貧しきものに分配するという発想から来ているのではないでしょうか。単に（分配という?新家）システムの問題で社会福祉を終わらせてはならないのではないでしょうか。社会福祉を専門にしているからこそ、社会福祉というものの本質について突き上げて欲しいと思いますね。それにアイヌ民族問題に関しては道庁が振回している、ウタリ福祉対策の検討は最も面白いテーマだと思います。現実に、社会福祉という名前をつけて、民族政策を社会福祉の問題にすりかえているのですから。そんな欺瞞をきちんと見ていく必要があります。

（所感）私も現場で社会福祉士として働いているのですが、現場でも社会福祉が同一化や同化の手先となっているのではないか、それはそろそろ終えるべきではないか、という議論が出始めています。例えば、挨拶ができないから働けないというのではなくて、それでもできることはあるという発想に変える必要があるのではないか、というのが現場レベルでもあります。

ただマリモについて研究者がいない、ということを先程言いましたが、人生五十年、百年の人間がマリモと付き合っても仕方ないんですね。そういうことから考えれば、人間は五十年、百年年生きる中で、こういう問題を論ずることができる生物なのか、とも考えるのです。私は山本多助さんとの出会いが決定的に私を変えたと言いましたね。研究者が「私は一五年アイヌの研究をやっている」と言えば「では、私は三〇年アイヌやっていると言え」と私に言いかえし方

を教えてくれました。そのような知恵をたくさん持っているんです。アイヌの長老の知恵は次から次へと出てきます。結局はアイヌの長老たちから学んでいるんですね。そういう発想ができる長老をすごいと思えば、老齢化社会の心配はないんですね。先住民族の考え方では、年行けば行くほど、精神労働するし、知恵も豊富になるし、歌うのも上手くなるし、踊りが上手になるし、こんな世界は面白いじゃないですか。八重清次郎さんはとても精神的に豊かですよ、毎月一日に自分の囲炉裏の火の神に一月の出来事を報告し、カムイが皆も見守ってくれるように祈ってね。ですからアイヌの社会では年とるということは不安でもなんでもないんです。みんなそうあるべきなんですよ。近代科学は年行けば行くほど悲しくなりますね。お金を持って防御しないと生きていけないし、若者からも相手にされない。アイヌでは年寄りが毅然として子どもや若者を育てるのですから。老齢社会の問題点は近代社会の「豊かな文明社会」の副産物ですね。少子高齢化社会は先住民族の考え方を保持していれば問題解決に近づけます。戦後民主主義の時代では年寄りは疲弊したんです。戦前の皇民化教育を受けた人々が新しい時代についていけない。だけど実際に時代が変化し、戦後の子どもが親をあてにできなくなった。学校と親の言うことが違ったわけですから。

やっぱり今の時代はどこか違っている。それを早く見つけ出して、整理して情報として流し、できるだけ多くの人々と共有すべきだと思います。私がこのように考える基礎は、アイヌ文化やアイヌの長老から聞いたこと、また実際に実感したことです。いわば私は無限の哲学の世界に出会ったわけだから。これは本当にすばらしいですよ。

そんなことで今日はとても盛り上がりました。社会福祉ということばが実態をともなって何か素敵な言葉になっているように頑張って下さい。以上で終らせていただきます。この後も皆さんと通じあえていけることを念じて、ヤイヤイケレ（有難うございました）。（拍手）

《付記》

本会開催にあたり、講演を引き受けて下さった秋辺得平氏、上野千枝子氏、財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構の桜井昭氏、同志社大学大学院社会福祉学専攻院生会、諸先生方、参加者の皆さんに感謝致します。

«Notes»

Some Issues of the Needs of Historical Perspective on Social Welfare Studies in the Ainu People's Affairs

Erika Shinya

The procedure to consider a necessity for the historical examination of the social welfare in the Ainu people's affairs at this article is as follows. The First, it makes a clarifying the Ainu people's affairs. The 2nd, it considers the necessity of the examination functionally, structurally and historically in the concerning by the Ainu people's affairs and the social welfare. The 3rd it showed three viewpoints of the historical research of the social welfare in the Ainu people's affairs. The 4th, it made an examination on papers written by the Ainu people in the 1920–30s through them.

«Material»

Culture and History of the Ainu and the Japanese Society Lectured by Tokuhei Akibe

This lecture record is composed of three parts.

The First, in "World View and Words of the Ainu", Mr. Akibe told his life story and the point in historical view, it showed it is important for each of us to ask by ourselves "who am I?" The second, in "Cultural History in the Ainu", he talked about "Ioru" (the hunting and fishing area) with some historical materials, the meanings of the Ainu's crest style and living together with nature including people. The 3 rd, in "Dances and Songs of the Ainu", he showed the richness of songs and dances in the Ainu, the life philosophy of the Ainu, it was also describing that the critical perspective to modern society through a question what is the true "abundant".